

俳句雜誌

令和八年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九卷第三号

水 明

2026 3月号



《今月のかな女》

初雷の嫩芽を叩く風雨かな

『龍膽』『雨月』所収 大正一五年

長谷川かな女

現代の歳時記では、春雷Ⅱ春の雷と初雷を同じ項目に載せているものと別々にしているものがあるが、立春後に発生する雷が春雷であり、気象上ではその区別が無いようだ。

筆者の見解では、春雷よりも初雷の方が詩情が濃く、立春後に雷鳴を聞いた人の主観が初雷につながるように思える。春になつて、牡丹・薔薇・楓・柳など、多くの花や樹木が一斉に芽吹き、諸人にその季節の到来を告げる晴れていた空が暗くなり、雷鳴と共に冷たい風が吹き雨が降り出した。枝から顔を出した嫩芽を容赦なく叩く風雨である。その様子をじっと観ていたかな女の慈愛の心が俳句になった。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

たう たう と坂東太郎冬麗

山中みどり

季音月

薄ら日を富士と分け合ふ枯野かな

曲淵徹雄

季音花

志士たちの馳せし道なり藪柑子

横山君夫

水明集

柚子風呂の一個のゆずが近寄らず

飯田忠男

山紫集

冬霞鯉のくちびる透きとほる

梅澤輝翠

水 明

令和 8 年
3 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

身の上話 (作品)

五湖の梅 (近詠)

春を待つ (近詠)

百尺竿頭 〓 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 〓 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

山本鬼之介

鳥羽和風

島津初花

五明 昇

檜鼻ことは

山中みどり 網野月を
石井喜恵 ほか

曲淵徹雄 原田秀子
大場順子 ほか

横山君夫 池田珪子
染谷風子 ほか

網野月を

なつはづき

水 明 集

飯田忠男 綿引まりこ
反町 修 ほか

31

30

28

23

18

12

10

8

7

6

4

1



作品鑑賞

山本鬼之介

42

水琴窟（水明競詠鑑賞）

池田雅夫

46

山紫集

菅原卓郎

48

俳誌望見

梅澤輝翠

54

句集喝采

菅原卓郎

55

鼓笛集新選者インタビュー

菅原卓郎

56

水明塾全句講評講座

水明塾全句講評講座

58

例会報・各地句会報

例会報・各地句会報

61

新春俳句大会の記

青木鶴城

66

水明の記事他誌から転載

水明の記事他誌から転載

68

令和八年水明全国大会のお知らせ

令和八年水明全国大会のお知らせ

69

令和八年水明全国大会兼題句募集

令和八年水明全国大会兼題句募集

70

春の吟行会のご案内

春の吟行会のご案内

71

風声／水明発展基金御礼

風声／水明発展基金御礼

72

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

身の上話

山本鬼之介

飴切りは披講のリズム初大師

部屋の灯を消し鰭酒の青火かな

心根よ津軽訛の雪女

風花が連れてきたるか機の音
道産子の人馬一つになる雪野
巖寒や毘沙門天の怒り肩
進水の漁船見送る野水仙
兄貴遺愛のアコーデイオンを春近し

五湖の梅

鳥羽和風

梅 林 の 鳥 兎 匆 匆 に 蒼 かな
梅 二 月 音 の 残 り し た た き 網
戸 袋 へ 板 戸 納 め て 残 雪 梅
白 梅 や 板 一 枚 の 船 着 き 場
船 小 屋 に 風 を 遊 ば す 梅 月 夜
梅 が 香 や 五 湖 を 絡 め る 花 の 白
野 仏 の 半 眼 に あ る 梅 の 花

福井梅の発祥地である三方湖畔では梅の開花に合わせて例年二月下旬ころから約一カ月間観梅園がオープンします。湖を背景に白梅の花がほころぶさまは若狭の早春の美しさを堪能させてくれます。又水明御一行の若狭訪問の折のお宿の「水月花」もここに在ります。三方五湖の湖畔では地元生産農家が手作りの梅干しなどを一年中販売しており、その風光明媚な景色とともに五湖巡りの楽しみの一つになっています。船小屋も一つから二つに増やして屋根の葺替えも美しくきれいになりました。俳人の皆さん是非お越し下さい。

春を待つ

島津初花

先祖から変はらぬ山河初景色

寒梅

新島襄

水引のピンと張りたるお正月

庭上の一寒梅
笑つて風雪を侵して開く
争わず又力めず

真つ新の産着の赤児初日の出

自ら百花の魁を占む

初鴉真澄の空を旋回す

梅ほつほつ池水に現はる真鯉かな

俳句を学びながら、二十年間極めた吟剣詩舞道は八十才でひと句切りとしたけれど、梅の花の咲く頃になると頭に浮ぶ詩舞の「寒梅」は私を力付けてくれる詩なのです。
わが家の庭の一本の白梅は、随分古木なのに風雪に耐えて春を先駆けで咲きます。

夕星や梅の小枝へ紛れ込み

且つて、鳥羽公園の城子句碑に刻まれた句は「生涯の友」と詠まれています。

白梅の満ちたるところ師の一句

句碑のそばに植えた白梅も毎年春に咲き、良き香りを放っています。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

十二月号

羽衣の松よ畏き新松子

地上に舞い降りた天女が浜辺の松に掛け忘れた羽衣を漁夫に拾われ、それを返してもらうために天人の舞を舞うという「羽衣伝説」は日本各地にあるが、駿河国三保ノ松原を舞台として編まれたのが世阿弥の謡曲『羽衣』である。件の「羽衣の松」は現在三代目だが、御穂神社の御神体として崇められており、新松子（青松毬）もおそろそかには扱えない。

つるべ落しの交番仕切る巡査長

日本の警察官の階級は警視總監・警視監・警視長・警視正・警視・警部・警部補・巡査部長・巡査の九段階。巡査長は正式な階級ではないが、巡査部長の下位に位置する「職位」で、巡査の実技指導や勤務の調整を行い、職場のリーダーとして警察組織を支える。暮れやすい秋の日、腕まくりで交番を仕切る巡査長の姿には、『こち亀』の両津勘吉の姿が重なる。

瓦斯燈のむかしを偲ぶ枯柳

銀座通り沿いに八十五基の瓦斯燈が灯ったのは明治七年、

文明開化の象徴と言われ当時の話題をさらった。柳は同二十年ごろ銀座通りに植えられ、銀座のシンボルとして人々に親しまれた。いずれも街や人とともに社会の変化に翻弄され、喪失と復活を繰り返してきたが、今は、「銀座ガス灯通り」「銀座柳通り」としてむかしを偲ぶよすがとなっている。

雪もよひ想ひは遠き鷹峯

たかがみね

鷹峯は、京都市北区の鷹峯街道を中心に広がる地域名。元和元年（一六一五）、本阿弥光悦が徳川家康より御土居以北の八、九万坪の原野を拝領して、一族縁者を引き連れて移り住んだことから、京都の芸術・文化の一大拠点となった。雪催いの一、光悦寺、源光庵、常照寺などの名刹が立ち並び閑静な一帯に想いを寄せた、诗情溢れる一句である。

独り酌む粹酒「加賀鳶」こつもごり

石川県銘酒「加賀鳶」は加賀藩江戸屋敷お抱えの火消しの名で、長半纏に染め抜かれた雲に雷をモチーフにしたロゴマークは、加賀鳶連中の心意気と地酒の力強さを表現している。粹なキレ味と純米の旨味のバランスが特徴で、「辛口なのに旨味がある」粹酒として人気が高い。大晦日の前日、一

年を顧みつつ独り酌む銘酒の味はいかばかりか。

一月号

躍動感漲る吉書大社

書初めの歴史は古く、平安時代の宮中の「吉書の奏」に始まる。年始の節目に天皇に文書を慶賀を述べ奏上したものが、鎌倉・室町時代には「吉書始め」として定着、江戸時代になると寺子屋の普及により「おめでたい新年に書道をする」という行事が広がった。書初めの書は一月中旬に神社等で行われる「どんど焼き」で燃やされるが、その炎が高く上がるという字が上達すると言われている。

明眸の見据うる的や弓始

弓始は新年に入って初めて弓を射ることで、中古は宮廷行事であったが、鎌倉幕府に取り入れられ、徳川八代將軍吉宗の時代に武家の正月儀式として定着した。現代は五穀豊穣や厄除けを祈願する神事として、各地の神社の正月恒例行事として継承されている。山口・防府天満宮では、成人の日に今年二十歳になる青年男女が弓始式の舞台上立つが、その明眸の先には「邪」と書かれた的が設えられている。

水神の眠る湖底ぞ初霞

水神とは水を司る神の総称で、日本古来のアミニズムに基づき、農業用水や飲料水、井戸など生活に不可欠な水に宿る

神として崇拝されてきた。湖、沼、川、泉など身近な水辺に祀られ水神様として親しまれる一方、象徴として蛇や龍の姿で現れることもあり、これらは水神の神使とされたり、神そのものとされたりする。初霞が立ち込める湖上には、九頭の龍に姿を変えた水神が今にも湧き上がりそうな気配が漂う。

年男を歌留多で負かす年女

その年の干支にあたる年男・年女は、十二年に一度の当たり年で縁起が良いとされ、年始を祝う祭祀で初太鼓を鳴らす節分の豆まき役になるなど活躍の場は多い。歌留多はポルトガル語のカルタ（手紙、カード）に由来する日本の伝統的なカードゲームだが百人一首、いろはがるた、花札など様々な種類がある。掲句は正月行事で何かと下風に立つ年女が、歌留多で年男を打ち負かすという諧謔味溢れる一句だ。

謹厳な隣家の主四方拝

四方拝は、元旦の早朝に天皇陛下が天地四方や祖先の山陵（陵墓）を拝み、国家の安寧と国民の幸福、五穀豊穣を祈る宮中儀式で、現在でも宮内庁で執り行われている。近年ではその精神を受け継ぎ、家庭でも新年の始まりに各方向へ祈りを捧げる形で実践する人が増えているが、お隣の御主人もそのお一人か。神々や祖先に感謝と祈りを捧げ、一年の無事と繁栄を願う習慣は崇高だが、凡人に真似はできない。

ゆずり葉

◆季音一月

檜鼻 ことは

終焉に向かふ華やぎ山粧ふ

山中みどり

それまでは緑に覆われていた山々が、陽の光りと寒暖差により鮮やかな赤や黄色に染まった紅葉は絵画のように美しく、陳腐な言い方ではありますがまさに錦絵の如くです。

句を拝読し印象に残りましたのは、「終焉に向かふ」と「華やぎ」という、一見相反するような言葉の取り合わせです。

山が紅葉によつて最も華やぐその瞬間が、同時に衰え・消えゆく方向へ向かう時でもある。そのような自然の摂理を捉えた作者の視線を感じます。

美しい紅葉の描写にとどまらず、終焉という言葉添えることで、盛りの美の背後にある終わりの気配を、端正な言葉で包み込み、美の絶頂にある紅葉の頃がすでに別れの時を孕んでいるという、それ故に際立つ紅葉の華やぎが伝わってきました。

女面の口元ゆるぶ浅き冬

永野史代

「女面の口元ゆるぶ」の措辞がとりわけに印象的です。能面そのものに表情の動きはありませんが、実際の舞台において、上を向くと「照り」、下を向くと「翳り」というように、同じ面でも全く違って見えるという能面の表情が巧みに詠まれています。

「ゆるぶ」は、単なる笑みではなく、緊張がほどけていくような気配、凍りつく前の一瞬の温もりを感じます。さて演目は何だったのでしょうか。冬に入ったとはいえ、まだ厳しい寒さを感じない時節の感覚が、上五中七の措辞と呼応し、寒さへと向かう中で、人の心もまた完全には固まりきらない、そのはざまを静かに照らしているかのようです。

能の女面の表情と季節の移ろいが重なり合い、微細な変化に美しさを見出した一句、静謐な余韻を感じました。

深入るな紅葉山には鬼女のゐる 内田恵子

奈良を旅した時、店の名に魅かれ鬼無里（きななき）という居酒屋に入ったことがあります。亭主によりますと、店の名は、長野県裾花川の源流域に沿ってひろがる山間地域、鬼無里の里に由来するとのことでした。現在は、谷の都として知られ、鬼女紅葉伝説、木曾義仲ゆかりの物語など多数の伝承が残っている地域です。

さて、句は冒頭から緊張感を伴って読者に迫ります。紅葉山は本来、華やかな美しい景色であります、「深入るな」と制すること、その美しさの奥に潜む危うさのようなものを想起させ、紅葉山の人を引き込むような美しさを一段と鮮やかにしています。

「紅葉山には鬼女のゐる」の措辞は、具体的な描写を避けつつ、読者の想像力を最大限に喚起します。鬼女は、怨念・哀しみなど、人の負の感情を凝縮する言葉ですが、紅葉山という自然の景と結びつくことで、人の心の闇や、踏み越えてはならぬ境界を象徴しているかのようにも思えます。物語を読むように拝読した一句です。

熊出現姥捨山に人の影 大村節代

熊による被害が、例年になく多く報じられた令和七年でした。「熊出現」という硬質で新聞の見出しのような言葉に、切迫した現実感を強く感じます。そしてそれに続く「姥捨山

に人の影」の措辞により、単なる時事句ではなく奥行きのある句であることに気づかされます。

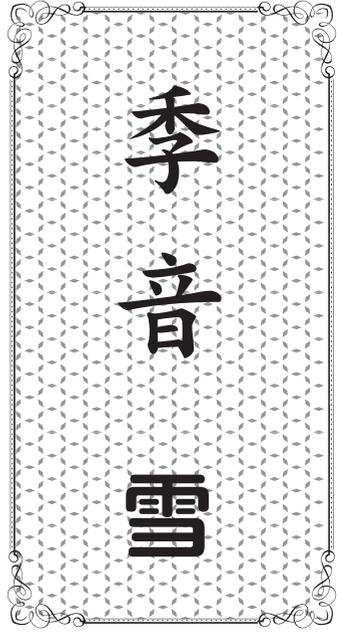
深沢七郎は民間伝承の棄老伝説を題材にした「檜山節考」を世に出しましたが、この句も棄老伝説を背負った山の名を取り上げる事により、弱き者が切り捨てられてきた歴史や人の非情さを象徴的に孕んでいるかのようです。

熊出現と言う事実よりも、人と自然との境界の揺らぎ、人間の側の脆さや後ろめたさが詠まれているような気がいたします。現代の出来事を題材に、人と自然、強者と弱者、生と棄却の問題までを照らし出し、読む者に重い問いを残す一句です。

あなうれし里の甘さの柿届く 熊倉千重子

「あなうれし」のことは胸に沁みます。奥ゆかしく、やわらかな感嘆の言葉が、思わず声に出した作者の喜びをそのままに写し取り、作為のない率直さでその気持ち伝えてくれます。さらに、「里の甘さの柿」の措辞は、柿が採れた里の持つ人情や優しさ、ゆるやかな時の流れを内包しており、味覚の美味しさとどまらず、作者の里への思いを情緒豊かに伝えてくれます。

句は、「届く」と簡潔に結ばれていますが、柿を送ってくれた人の存在と心遣い、思いがけない贈り物に対する作者の喜びが余韻として残り、読むほどに味わいの増す、あたたかな作品です。



福寿草 山中みどり

後継の絶えし寺領や福寿草
将門の武者の塚とや福寿草
無住寺に銅羅の余韻や冬椿
冬麗や梅の古木に藁の龍
たうたうと坂東太郎冬麗

桜島 網野月を

御岳の見つめる去年や二十五時
南岳の初咆哮や御降り来
妻神の睦月を迎ふ咲耶島
錦江湾を初鏡とし向島
桜島その懐に蝶凍てる

晩冬 石井喜恵

聖堂の静寂冬の夜の祈り
初霜の玉砂利を踏む奥社
色褪せし絵馬重なりて冬ざるる
手相見の灯冬ざれの街角
花柀雨も小止みの窓明り

初御空 井上燈女

初山河 大橋廸代

寒鯉をぶつ切る俎年の市
薪を割る音の重たき雪催
高からず女物干す初御空
子の机使はず捨てず年新た
買ひ疲れ人疲れして初買に

切れてをる半月板や去年今年
瑞鳥の現るころほひ初山河
求婚の旅初富士へ深呼吸
瓢箪池跡へ琅琅寒の鳶
真白なる寒鯉決して口開けぬ

その件くだり 石山 かつ子

小春日 大村節代

熱き掌を握り返して雪催
飴色の若き日の櫛小春かな
雪催鳥声ひくく通りけり
初読の八雲全集まだ半ば
その件も一度語つて囲炉裏端

口ほどに熊を憎まず冬木立
小春日や鯉の背鰭の見え隠れ
日の暮れの賑やかすぎる蜜柑山
短日やあらぬ段差にけつまづく
日短し右脳が俳句膨らます

春 着 菊池ひろこ

夢に酔ふ 境 延昭

春着しまふ祖母の見立ての畳紙たたうしに
そよそよと春着の幼通おきなりけり
メール来し白き筋あり初御空
元朝やしばし他人の夢にゐて
椀の香もさざめきもよし冬の月

屠蘇酌んで宇宙旅行の夢に酔ふ
連れ合うて本卦還りの雑煮食ふ
めでたきは曾孫初湯のおちんちん
端端に過去の権勢年始酒
壁の染み天女に見立て寝正月

放 下 五明 昇

新 年 島津初花

冬晴や降神願ふ禰宜の声
攻防久し古城の堀の枯蓮
一切を放下の冬木仁王立ち
短日や動く歩道を急ぎ足
冬の夜や小鍋をあやす自在鉤

門松を求めに山路鈴振りて
松飾り終へて匂ひの身に移り
新幹線終点晦日に里帰り
二千六百の赤児賜はるお正月
好きな事許して茶の間三ヶ日

鰭 酒 鈴木康世

鰭酒や舞子あがりの若女将
鰭酒や宿の主は粹まじの人
鰭酒の五臓六腑に染み渡る
鰭酒や酔狂の眼が見えかくれ
鰭酒に偲ぶ往時の京の旅

実 千 両 十 倉 和 子

実千両供へ祖師堂明るうす
回廊はしかと拭き込み実千両
畳なはる山を遠見に若菜摘む
夜明けかと思紛ふほどの雪明り
銃声を弾き返して山眠る

春の走り 鳥羽和風

坐禅して邪念一掃牡丹の芽
青空に枝突き差して梅の花
恋猫の一部始終をカメラかな
へらへらと鯉が笑はす春の月
啓蟄や蓋の重たきマンホール

舐めるやうに 永野史代

かなしびは十二月八日の青春
陽をはじき返してゐるのは初霜
柚子湯ポンポン胸にぶつかり弾けたり
放浪の熊の子かなし冬ざるる
冬至の陽わたしを舐めるやうに入る

馬駆くる 星野和葉

部屋部屋に馬駆けてをり初曆
塗椀に風呂吹と味噌鎮座せり
風呂吹の隠し庖丁古き技
冬ざれを来し面面も冬ざれて
枯蔦や小さき窓を羽交ひ絞め

山のもの 町野広子

枯蔦を頼りに探す山のもの
電柱の天辺までの蔦枯るる
冬ざれの海に向かひて吹く喇叭
冬至粥母の遺せし大土鍋
歳晩の相模一円晴れ渡る

老の春 松井由紀子

四捨五入すれば百なり老いの春
初雪のしんしん神事たまふごと
介護終ふと笑みて泣く友冬ぬくし
寒晴れや大樹ひと葉も残さざり
買初や香ばしきパン抱き帰る

枯れながら 茂木和子

干し柿の色よし粉の噴き加減
陽は斜め更に色増す実南天
実南天ひとときは大家の長屋門
朝ごとに四色の薬実南天
枯れながらまだ紅残す蔦の呼吸

初日の出 森川 義子

穏やかに迎ふる米寿初日の出
なき人の席もしつらへ屠蘇を酌む
おでん酒友在りし日を目交に
ひとときの光惜しみて冬の蝶
雪催燭細くして文殊堂

睨み鯛 森本 早苗

睨み鯛貫禄を増す化粧塩
絵双六東海道を小半時
大手町檄の飛び交ふ三日かな
満面の笑みと向き合ふ初鏡
喜びと安堵の笑顔初句会

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2026年3月号

特集

「独り」は力

俳句と孤独

- ◎孤独がもたらす力 和田秀樹 (医師)
- ◎孤独が個性を育む 下重暁子 (作家)
- ◎孤独感から生まれた俳句

行方克巳 守屋明俊 恩田侑布子
辻美奈子 西澤日出樹 小田島渚

グラビア 俳句界NOW 古澤宜友

特集 俳界ちゃんネル

〜令和の新結社たち

「あくあ」 荻羊右子 「さら」 神谷章夫

「星座」 樋口保 「風琴」 皆川燈

「実の会」 桑田真琴

シリーズ 推薦！注目・期待する俳人④

田口耕 大川畑光詳 託問えりこ

田中みちこ 金子圭子 伊波とをる

セレクション結社「俳句座☆シーズンズ」

『注目の句集』村田まみよ『光の遊戯』

連載

宮坂静生 青木亮人 林誠司
石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄
坂口昌弘 八田九郎

「俳句界」投稿欄 一流選者10名！
充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

季音月

武蔵野枯る

曲淵徹雄

返照に燃え尽きなむと冬紅葉
顔見世や拵へ如何に鷺娘
狐火の嘻嘻と渡るよかづら橋
薄ら日を富士と分け合ふ枯野かな
絹の道の浪漫を画布に冬館

梟

原田秀子

瞠目の梟賢者の貌をして
敬てて梟を聴く峡の宿
梟やミネルバの知恵と勇氣もち
慈善鍋白衣戦士の手風琴
流れくる「異国の丘」や慈善鍋

白鳥

大場順子

冬野行く我心奥に勢あり
雪原の雪の底行く最上川
雪はもののかたちをなさず雪女郎
珠ほどき白鳥となる夜明けかな
金蘭の友と鱒酒汲む夜かな

献盃

正木萬蝶

しまひ湯の柚子いぢらしき夜更けかな
狛犬に似たる犬つれ初詣
享年四十位牌の夫に酌む身酒
家格ゆかしき母の嫁荷の春着かな
魚拓活く寒九の水を掛けられて

白き恋文

梅澤佐江

冬夕焼成就せざらむ恋に似し
糸尻の温み愛しむ雪催
寒紅や深き翳りの般若面
天よりの白き恋文淑氣満つ
七日粥つつましき香の浅みどり

寿限無 青木鶴城

梵鐘や去年と今年の橋渡しし
何故に敵かたきとなるや寒鴉
光明は笑顔にありて実千両
小春日の睡魔の呪文寿限無かな
縄飛の百を数へてまだ止まず

注連飾る 松宮保人

訳ありて沢庵石は野晒しに
冬至粥啜り自愛の八十路坂
冬の夜や風なく屋根の軋む音
鎮守なる烏天狗や注連飾る
永年の家風護りて松飾る

春を告げる 原田自然

高僧の修二会へ向かふ一本歯
送水会僧三人の読経かな
大松明を引きずる本堂春を告ぐ
大護摩やうの瀬の春の闇焦がす
願文のはらり舞ひたる春の溪

寒の入 丸山マシミ

風花や前掛け赤き六地藏
冬ざれや走り根硬き行者道
姫街道の関にて消えし雪女
巻きぐせの戻らぬままの初暦
始発駅指呼の手凜と寒の入

電飾 近藤徹平

雪催電飾にじむ丸の内
菩提寺の覺見下ろす大枯木
事件記者追ふや人家の無頼熊
駐在の宿直の伽や雪女郎
社会鍋「異国の丘」の手風琴

初雪 檜鼻ことは

初雪や檜の匂ひする湯舟
ほろほろと豆の香りや十二月
沢庵や所作美しき禪の僧
残業の父待つ家族クリスマス
注連飾築百年の面構へ

不戦の誓ひ 日高道を

年 新 た 不 戦 の 誓 ひ 道 半 ば
初 山 河 平 和 と い ふ 儂 き も の
吉 凶 に 一 喜 一 憂 初 神 籤
初 神 籤 大 凶 引 け ば 恐 い も の 無 し
初 戒 一 番 福 を 取 り に 行 く

長女の目 松島寛久

初 鏡 祖 母 の 面 影 長 女 の 目
引 き 上 げ し 船 に 注 連 飾 里 の 海
御 先 祖 と 猫 に 「 た だ い ま 」 旅 始 め
古 里 は 和 と 輪 の 中 に 注 連 飾
門 札 者 し ば し 讃 岐 の 歌 碑 の 前

初日さす 井上玲子

初 日 さ す 磨 き 上 げ た る 窓 ガ ラ ス
潮 騒 を は じ く 断 涯 黄 水 仙
供 花 と な し 香 を 分 ち 合 ふ 黄 水 仙
冬 夕 焼 け 小 鳥 は 巢 へ と 帰 り 道
寒 夕 焼 け 洪 鐘 わ た る 帰 り 道

巨大都市 荒井俱子

ク リ ス マ ス 闇 を 忘 れ し 巨 大 都 市
電 飾 を 解 か れ し 樹 樹 の 冬 ざ る る
狢 犬 の 足 の ふ ん ば り 冬 ざ る る
雑 炊 や 昭 和 は 飢 餓 と 飽 食 と
お た が ひ の 齢 ほ め あ ひ 玉 子 酒

お絵描き 内田恵子

焼 き 立 て の ジ ャ ム パ ン 餡 パ ン 冬 う ら ら
カ ス テ ラ の 甘 き 香 の あ る 刈 田 道
暮 早 し 一 本 道 を ス ク ー タ ー
水 鳥 や 爪 先 立 ち で 行 く 少 女
絵 描 よ り お 絵 描 が よ し 十 二 月

早春賦 池田雅夫

年 波 に 先 走 る 気 や 浅 き 春
春 寒 を 背 負 う て 重 き 足 運 び
麻 痺 の 手 の 伸 び る 爪 や 余 寒 な ほ
草 萌 や 五 体 の 如 意 を よ る こ ば む
焼 野 来 て 濃 ゆ き 足 跡 点 点 と

屠蘇祝 上戸 千津子

六日早や月日の流れ感じをり
この所屠蘇散入れず屠蘇祝
初詣撫で牛光り恙無し
里神社人影も無し雪の中
初日の出聞いて想像老いの日々

波紋 野口和子

オカリナの探すファの音冬夕焼
波紋にも音のありけり空つ風
牡蠣鍋やひびあるままの益子焼
きゆうきゆうと白菜の音漬けにけり
初神楽深まる木立奥の院

木履 福田千春

出刃で割る冬至南瓜の頑固かな
二千二五個の袖風呂息がつまりさう
幼子のねだる煙突クリスマス
晴着の子なつかし母の総紋り
晴着の子タップダンスをぼつくりで

里の冬 大塚茂子

鍵かけぬ里の軒先大根干す
大き樽自在に曲げて沢庵漬
到来の藻塩大事に漬大根
石臼を沢庵漬に乗せる兄
闊歩する秩父夜祭大花火

米寿 飛永鼓

米作の米寿の夫の心意気
門松を立つる家長の威厳かな
太陽は出ても出なくも初景色
庭にごみ一つ気になる初景色
初鏡八十路の亡母の顔を見る

大吉 河野はるみ

家族増えお膳に揃ひ春小袖
母と子の揃ひの春着紺デニム
運勢は母子大吉初神籤
獅子舞追ひ童どこまで迷子席
木星を追うて寒月天翔る

歌留多会

石川理恵

尾毘骨つつつと痛む寒さかな
極楽の柚子湯わたしもカピバラも
色褪せし家族写真や冬至光
継母と暮らす話や読始
朗朗と師の声ひびく歌留多会

寒の富士

松山清子

箱根駅伝韋駄天走り輝やきて
粕汁やふた昔前大家族
板橋の辻からも見ゆ寒の富士
初舞台凜凜しき武者の御曹司
顔触れの変はらぬが良し初句会

初詣

田中章嘉

異邦人衣服の夫婦初詣
初詣津波のごとく一波二波
トラツクに初荷の旗を靡かせて
七草や皆が揃ふも時を待つ
鉢植えの松に残せし雪の傘

俳句

3月号 予告

2月25日発売

巻頭作品50句 一宮坂静生
作品21句 一若井新一・岩岡中正

予価1,100円(本体1,000円)⑩

特集

時代別春の名句一〇〇選

〔はじめに〕春の名句の魅力

〔鑑賞〕近世・明治・大正の名句／昭和の名句／平成・令和の名句

〔おさらい〕定番季語の本意／知っておきたい季語

第14回 星野立子賞・

星野立子新人賞 発表

選考委員評／受賞のことは／受賞作抄

句集特集 山田真砂年『夜は昔の』

はみ出せ！俳句……………夏井いつき

小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人

飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉

好評連載

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

藪柑子

横山君夫

狐火や人家の灯ならなほも奥
志士たちの馳せし道なり藪柑子
地下鉄を出るや銀杏の落葉浴ぶ
きしみゆくトロッコ電車冬紅葉
冬ざれの農道に深き轍かな

初冬

池田珪子

鳥居なき祠の神も旅立ちて
門のある墓の家絶え花柀
冬の朝息の合うたる杜氏唄
花も葉も正しくありて帰り花
庫裏までも冬の日届く伊賀の古寺

銀杏返し

染谷風子

野仏に落暉手向けむ枯野人
顔見世や四条河原に柀の響
決然と斜陽に立つや大枯木
囚獄の重き鉄扉よ冬夕焼
結初の銀杏返しよ浅草寺

一陽来復

鈴木玲子

幻の利休枯野に手招きす
熱爛や悔し涙と哄笑と
煩惱の溶けゆくひとり柚子湯かな
運盛りてうんと食べよと冬至粥
ゴッホの黄冬至南瓜の煮くづれて

松過ぎ

渋谷きいち

松過ぎの風も素通り寺の町
深山幽谷深き眠りの凍る滝
凍滝の内に秘めたる重低音
夜廻りの首に手をやる小塚原
寒九の水溢れて濡るる診察券

旨き物

石田慶子

極月の回覧板に「至急」の文字
アップルパイみやげに急ぐ枯野道
焼芋はほくほくが良し白湯が良し
ポケットに忍ばす指輪イブの夜
逆上り出来さうな君冬日和

宿 夕

保坂翔太

お手玉講座開く老婆や小春空
山城の山眠らせぬ冬紅葉
冬紅葉鳴き龍吼ゆる日光山
宿夕の峡の旅籠や冬銀河
煤払ひ顰め面なる仁王像

枯木立

笹本啓子

見惚れたる骨格の良き枯木立
落とすもの無き明るさよ枯木立
蒼天に五指を伸ばして枯木立
見なれたる雑木林の淑気かな
初茜タワーマンション染め上ぐる

水仙花

越田栄子

生きること捨つることなり枯木立
寒菊に添へ木四五本風過ぐる
亡き母の愛でし花なり水仙花
水仙の咲きて母の忌近づきぬ
初日の出未来ばかりの赤子抱く

スニーカー

梅澤輝翠

長長と講釈聴きて冬の雷
初雪の朝の目覚めや湯気二つ
豊漁を柏手ひとつ注連飾る
小春日や三味の音洩るる神楽坂
凧揚げの児を追ふ爺のスニーカー

銀灰色の世界

菅原卓郎

峻嶺へはしる冬の野の高圧線
飽食の世に底さらす慈善鍋
雪雲にうづく腕の古き疵
般若湯すすする老尼や年用意
霜の夜のやまぬ蛇口の雫かな

北風の吹く 下川光子

北風の吹くたび深む象の皺
懐手鐘の音六つ寛永寺
冬草や早早と点く工事灯
菩提寺や地藏に新の冬帽子
風花の団子屋に入る子も入る

水鳥 山戸美子

水鳥の浮寝羨む眠れぬ日
友逝きて飛ぶ水鳥の声侘し
水鳥の羽音あまたや飛び立てり
参加する特別授業冬日和
金婚やまづ参拝す十二月

初雪 清水桂子

独りゆく男の背中枯木道
雪催ひ街灯ほのと午後三時
数へ日やでんと場所とる大き鍋
こぼれ落つ花柵の夜を匂ふ
初雪の静止面に似て息を呑む

冬日和 西幅公子

穂高岳ひかる白銀去年今年
凍つる朝びたり寄り添ひ盲導犬
水下魚つまみに時を忘るる山仲間
何もかも干したくなるや四温晴
数へ日の姉さん被りてんてこまひ

冬空清し 山岸久美子

閔兵のごとメタセコイアの枯木立
その影も夕陽に染まる枯木立
心に沁むる昭和歌謡や去年今年
粕汁や母丹精の味を継ぎ
冬の日の全き光地に満てり

歌留多会 宮崎チアキ

初春や子等の声待つ塾の庭
蠟梅葉の輝く大地実千両
遠き日の記憶呼び込み歌留多会
三味の音に心弾むや女正月
新道をキャリーバッグの支へかな

正月 葛城 千世子

正月花枅に生ける子さつさつと
正月の訃報や真夜を運転す
初写真花に紛るる少女かな
昇降機のボタン押す押すマントの児
仕事始め無口のまんまペダル漕ぐ

年改まる 寺内 洋子

正月や赤児の泣いて祝はるる
頭髮の薄さしみじみ初鏡
見た筈の初夢おぼろ口惜しや
正月や娘は小言幸兵衛か
愛日やひざにでぶ猫手には本

箴の音 野村 美子

努力報はれ裂織賞に十二月
機初の明るき糸や箴の音
読初や「ぴあ」の全国美術展
月冴ゆる函館山に立つ我に
町並古き若狭街道冬の雨

銀座日和 森 和子

崖下の広がる荒磯寒日和
木の瘤に潜む力や冬日和
冬至とは思へぬ銀座日和かな
居並びて古暦投ぐるお焚上げ
賑はひの仏壇通り暦売り

初鏡 高橋 満耶子

初髪やポニーテールは跳ねたがる
駆け巡る馬の親子の賀状かな
羽繕ひのインコ仲良く初鏡
初山河ホームステイに行く話
孫達と座卓を囲み初麻雀

楽事 綿貫 ひさの

大入りに餅花ゆるる演芸場
念願の十七番や初みくじ
初詣遠回りしてかな女の碑
眼を据うる取り札二枚歌がるた
双六も休み休みでびりとなり

秘すれば花 佐々木 史女

長き夜や亡き人来る夢の中
見残しの夢にこだはる長き夜
年おくりごうかなごうかな祝膳
病院の新年迎への祝膳
病院の患者思ひの杖かろし

誤植訂正

二〇二五年十二月号に慎んでお詫び致します。六九頁下段

正 色鳥の枝の小揺れへラジオ消す

誤 色鳥の枝に小揺れへラジオ消す

二〇二六年二月号に慎んでお詫び致します。三三頁下段

正 古木にからみ赤を極むる烏瓜

誤 古木にからみ秋を極むる烏瓜

特集 類似類想句どう考える

エッセイ―青木亮人・今井 聖・高柳克弘
筑紫磐井・藤 英樹・村上喜代子
巻頭作品10句

石井いさお・戸恒東人・中村雅樹
松浦敬親・藤本美和子・対馬康子
伊藤璵子・日下野由季

俳壇

3月号

2月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
古賀しぐれ
八木健選 滑稽俳壇

俳壇賞受賞第一作30句……………馬場公江

特別作品30句……………高橋陸郎

四季巡詠33句〔第V期〕……………川井城子・佐怒賀直美

風の旋律……………小澤 實

セピア写真館……………田湯 岬

連 載 季語を考える……………仁平 勝

編集室の風景……………天塚俳句会

今月の句……………水明俳句会

俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430

現代俳句鑑賞

網野月を

病室の枕辺へ置く室の花

鈴鹿 呂仁

〔俳壇〕12月号・残日のつれづれにより

座五の季語「室の花」は本来、梅のことであるが、昨今は多種多様な花種にも用いる季語のようである。何の花であろうが、早咲きを促された花であることは間違いないところである。上五中七の「病室の枕辺へ置く」というのは、いち早く臥す人へ花を届けたかったのである。花を見せて慰めたかったのである。見舞う人の真の優しさが描出された御句である。他に「陽を求め七つ転んで冬の蜂」がある。

日戯るるナポレオン髭の菊人形

佐怒賀正美

〔俳壇〕12月号・秋の髭より

「ナポレオン髭」は三世のそれである。この景は日差しが「髭」に絡んでいるだけではなく、微風も感じられる。それにしても西洋人の「菊人形」とは珍しいものである。他に「ひげ剃りて可惜夜しみる秋の航」がある。

海鳴りやししやものかほの焦げやすく

しなだしん

〔俳壇〕12月号・恋患ひより

言われてみれば、その通りである。小魚青魚は焼き魚にす

ると先ずは頭部から焦げてしまう。上五の「海鳴り」の時空間の提示が中七座五を引き出している。他に「侘助の恋患ひのやうな白」がある。

波寄せてみづうみ深し浮寝鳥

大西 朋

〔俳壇〕12月号・温かくより

言語法は極めて古風な作法を感じるのだが、きわめて現代風なテーマを追いつつ、感傷というか作者の心象でそのテーマを包み込んでいる。上五中七の「波寄せてみづうみ深し」は理屈ではないし、事実を確認したことでもない。ただ一句にまとめられて読者を頷かせてしまう。他に「綿虫やてのひらあはせ温かく」がある。

Cのブルース野分の雲をちりぢりに

秋尾 敏

〔俳句〕12月号・君をポップにより

ミュージシャンの肩書をも持つ作者の面目躍如の一句である。「Cのブルース」とは多分、オスカー・ピーターソンの《C・ジャム・ブルース》であろう。座五の「ちりぢりに」が將にその通りである。皆様、一度お聴きください。他に「君をポップに石炭を焼べる」がある。

流星のひとつ子鹿の瞳となりぬ

遠山陽子

〔俳句〕12月号・読破より〕

カペラを主星とする駈者座は子鹿を抱く図として描かれる。つまり「流星」が抱かれている「子鹿の瞳」の位置に落ち着いたということであろう。冬の天体の、ロマンあふれる物語なのである。他に「読破せしあとの微熱や鳳仙花」がある。

狐火や厚焼き玉子のお土産

小川晴子

〔俳句四季〕12月号・季語を詠むより〕

上五を切れ字「……や」でおさめて、間をおいてから中七座五の「厚焼き玉子」である。取り合わせの句とも思えるのだが、何とも不思議な取り合わせである。筆者は王子権現社を思い浮かべた。

花八手よき時にまた集はんか

田中木江

〔俳句四季〕12月号・花八手より〕

「花八手」の形態は、集う子どもたちの様である。筆者の愛してやまない花である。ジュラ紀の植物を想起させるその形態は、一風変わっているのだが、中七座五の古風な口調の呼びかけが「花八手」に相応しい。他に「一年後読んでもかなし冬の号」がある。

手品師かそれとも詐欺師冬薔薇

田中朋子

〔俳句四季〕12月号・ひた走るより〕

寄席のいろもんである手品師は燕尾服の裾の方から薔薇を出現させたりする。詐欺師は薔薇を贈って人心を手中にする。

「冬薔薇」もシチュエーションに拠って活躍する為所が異なるのである。「手品師」と「詐欺師」を同列に扱って、違和感のないところが文学の妙である。他に「ふいに秋声海際をひた走る」「空蟬を見つけ絵画に青を足す」がある。

引き抜くね案山子の胸をぎゅっと抱く

神野紗希

〔俳句界〕12月号・永訣より〕

上五の措辞は「案山子」に呼びかけている。中七座五は作者の所作である。この作者はいつもビュリリツツァー賞的な一面面を見せてくれる。お役を終えた者へのやさしさを感ずる。他に「永訣や苔桃を煮て夜の国」がある。

水よりも火の似合ふ星年深し

日高道

地球は永遠に水の星か年尽く

〔俳句界〕12月号・水の星より〕

一句目は、年の暮れに作者がつくづく思うことは、「火の似合ふ星」になってしまったなあという感慨である。水の似合う星であり続けて欲しいという願望でもある。二句目は、すべてを言い尽くしていないので、読者に任されている部分が多い句であり、またその分読者の想像を掻き立てている。つまり「凍土の牛」を生あるものか、凍土の中に眠り続けてきたものか、ということだ。筆者は生あるものという鑑賞をした。嘗て「凍土」であった地に今は牛が反芻している、と解したのである。三句目は警告句である。一句目の願望に比して、「永遠に水の星」であるための人類への警告である。希求するものの重さを座五の季語「年尽く」に斂めている。

『水明誌』

を繙く

(水明十二月号)

なつはづき

〔「豈」

青山俳句工場05〕所属〕

相傘の人の背丈や夕時雨

山本鬼之介

相傘とは主に男女が一本の傘の中に入る事です。多くを語らずとも、この言葉ひとつでおおよその状況が解ってきます。恋仲のふたりなのでしょう。急な雨に肩を寄せ合ったに違いありません。外から見たらとても幸せそうな景です。

掲句の「人」は男女どちらの事でしようか。作中人物が作者の投影であるとしたらこの「人」は女性です。普段並んでいる時には気に留めていなかった相手の背丈に思いが至りました。想像よりも大きかったのか、小さかったのか…。

和歌や文学で、雨はしばしば「涙」や「悲しみ」「侘しさ」の暗喩として使われます。相手の背丈が負の感情の表れならばそれは不釣り合いな事への不安かもしれません。守ってあげなくては、と思っていた女性が思いのほか大きかったのです。勿論、大きいだけで強いわけではないのですが、自分の思い込みや、庇護してやらねばという無意識の奢りにはっとしたのかも知れません。同時に少しの淋しさも感じています。時雨は降ったり止んだり。愛もまた常に揺れ動く気持ちなのです。揺れるからこそ寄り添うのです。

声太き犬の影絵の夜長かな

菅原卓郎

犬の鳴き声、と言つてどんな声を想像するでしょう。今はチワワやトイプードルなどの小さくて室内で飼育されている犬が多いですが、かつては番犬として外飼いされていました。番犬ですからかわい声ではありません。泥棒が逃げ出すような大きな声で激しく鳴くのです。実際の犬ではなく影絵であつても実景の犬の鳴き声で声を当てています。「声太き」が言えて妙。太い声の主は女性ではなく男性であります。長い夜を影絵遊びに興じている平和な景が見えてきます。

犬は家族の中で序列をわかっている生物だと言われています。家で誰が一番偉いのかちゃんと見極めているのだとか。昔の家長制度の中では当然父親が頂点です。声が太く、時に大きな声でものを言っていたでしょう。この影絵の犬は実景でもあり、古き時代の父親像の幻影でもあるのです。

作者はかつての懐かしい遊びとして、子供か孫に影絵をやつて見せているのかもしれない。あの頃の父のような声を出して犬を演じています。いつかこの子たちは自分のこの声を思い出すのです。懐かしい思い出の影として。

山本鬼之介 選

水明集

勝鬨橋の上るを見んと都鳥

棒杵を見つむる男都鳥

柚子風呂の一個のゆずが近寄らず

コンビニに丸いポストや年の暮

取得なき吾にもなにか年果つる

ひそひそとささやくやうに秋の水

名月や斑鳩の塔浮かびくる

奥座敷小春明かりに木木の影

薄日さす我が影細き枯野道

モカ珈琲呼吸が白く凍る朝

さいたま 飯田忠男

綿引まりこ

枯山水白砂清むる秋時雨
何処から庭に一枚朴落葉

北風見沼田圃を舐め行けり

根深剥くツイッギーの脚懐かしや

巫女緩み宮司緊まれる神の留守

まづ頬に冬日差したる六地藏

出発の車掌の声や蜜柑山

マネキンと同じ服買ふ年の暮

さつきから鍋の煮えたる年忘れ

また一人遅るる知らせ年忘れ

奥能登の寒鰯並ぶ朝の市

単身の父帰る日や鰯大根

大判のマフラ―温し退院す

針と糸心愉しき小春かな

枯芝に夕影長き石碑かな

蓑虫が一張羅着て風の中

神の旅銀河鉄道運行中

馬籠宿足を滑らす時雨坂

御朱印帳捲る指先冬紅葉

木の実踏む古刹の庭の小春かな

さいたま 反町 修

石関六弦

霜多光代

寺町知子

はや終はる昭和百年師走かな
霜の声聴きつつ愛づる銘酒かな
オリオンの猛く見守る夜道かな
天空で神話語るや冬星座
冬銀河昇る星座を見下ろして

利根 倉田星歩

一抱への菊剪り呉るる農婦かな
手袋を外し夫の手握り返す
着膨れて眠剤効かぬ夫看とる
潔く布団抜け出す主婦の朝
石路の花検査結果を待つ窓辺

さいたま 本橋稀香

山茶花の咲き溢るるも力みなし
小春日や古墳の堀は萌黄色
灯芯を囲みて黙す聖夜かな
生籬に思はず会釈帰り花
冬めきて襟元正す夜明けかな

さいたま 秋谷風舎

呱呱高しお宮参りの小春空
伯楽の隠す涙や神の留守
葱届く宗旨の違ふ古新聞
古地凶手に街道ひとり神の留守
整然と薪積まれをり冬麗

田中弘子

晩秋の雲の隙間の小宇宙
柿落葉足音著き獣道
田の土の鎮もる玄や末の秋
山城の銃眼抜くる神渡し
冬ざれの軍艦黙す横須賀港

皆川更穂

人夫去り今は生活保護の町
ニニ・ロツソ響く路地裏寒昂
冬銀河何粒舐める浅田館
どこにいる高等遊民漱石忌
団塊のまた一人欠け年流る

元田亮一

出雲発寝台特急極月へ
船頭の喉に陽水炬燵舟
極月八日第九の盤に針が降り
小春日の中をぼとんと餌の蚯蚓
極月やトレビの水に弾む銭

森下山菜

山茶花の散りしき母の声褪せし
山茶花や誰にも言へぬことひとつ
雄は粉に雌は肴に柳葉魚かな
豊穰の北海のはて柳葉魚かな
馬の背を慎重に行く神の留守

前田夏野

浜辺ぶらつき時を忘るる師走かな
碑の由縁不明や枯野道
街路樹が惜しむことなく枯葉撒く
ジョン・レノン歌ふ聖歌がラジオから
年の瀬や髪形粋な担当医

平塚 丸屋詠子

満席の「サンライズ出雲」神の旅
神の旅車窓夕陽の日本海
仕事終へ魅入る師走の駅ポスター
夜咄を帽子編みつつ教へつつ
焼きもちや柳葉魚ほどよく焼けて夜半

吉川 杉浦千祐

キューピーがイエス・キリスト聖夜劇
枯野宿竈火照らす顔の黙
極月の書は跋文を最初に読む
貸金庫に入室易し熊穴に
日本に女宰相年暮るる

さいたま 小林京子

熊出ると怯む物音夜夜中
木枯や山の獣を懲らしめよ
ラッシュ時の焦り高まる短き日
吹きたまる畑の隅の落葉時
木枯や一気に廻る過疎地帯

若狭 岡本祥子

肌寒や四万湖のブルー深くなり
残照に締め輝き柿落葉
木枯の吹き残したる月白し
袴付け伏目がちなる七五三
登校班の誰もが無口冬の朝

菅原真理

佳き人は白き山茶花愛でてをり
赤まんなままごと遊びの腕の中
南座のまねきの文字のどつしりと
冬うらら四方山話に花が咲き
冬ざるる規律守らぬ人の増え

東京 畑宮栄子

残照の農夫の背中大根引く
山茶花を辿り余生の我がマンシヨン
柳葉魚焼く北海の香を漂はせ
棟上げの祝詞高らか小春空
玉砂利に木履揺らぐ七五三

岡田宣子

捲り癖の残る歳時記去年今年
四分の三終へし終生初詣
あるがまま生き抜く老や年送り
忘年会虚ろな影を曳き帰る
動脈のやうな走り根落葉かな

さいたま 香田裕誌

日光の人波切れぬ神の留守
風花や秩父眼下に一揆の碑
灯ともせば部屋やはらかに冬障子
凡庸に生きて幸せ花ハツ手
枯れてなほ蠟螂鎌を研ぐしぐさ

白岡 岡本和男

短日の中途半端な事ばかり
捕つて居る短日の長電話
拗らぬ事短日のせゐにして
凧が回す厨の換気扇
プレゼントのリボンは翠クリスマス

若狭 山崎郁子

北風や鉄瓶の湯のやはらかし
神の留守社に巫女の箒音
冬めきて朝靄かかる甲斐の町
裏庭に落葉ためたる手水鉢
冬めくや軒に薪積む人家あり

さいたま 阿部貞代

冬の雨フードの先を摘み引く
冬の雨LEDの長寿命
柿啜へ潰す烏や冬の雨
蛾の静か避けたるやうに冬の雨
花梨の実大し冬の雨優し

さいたま 吉川拓真

揺りかごに乗せられあやされ過ぎし秋
失言の不安治むる秋夕焼
小春日や南の部屋に衣紋掛
里の熊食ぶる物みな美味なるや
参道の落葉袂に隠しをり

川島夕峰

冬月やきりきり痛む心の臓
粕汁や朴訥とつと語りそむ
吞兵衛の昼から炙る酒の粕
クリスマスカードに添へる緑の葉
美しき一粒貴石聖夜待つ

大阪 遠藤人美

凧や山の天辺は丸坊主
凧や並木寡黙に佇みて
北風の吹くのに敢へて露天風呂
柿落葉鯉とコラボをしてをりぬ
大根をべつたら漬してご近所に

小川洋子

凧に長き夜来てほうと鳴く
精霊も息を殺して山眠る
山茶花の枝に誰かの正ちやん帽
眠る山道の辺で待つ道祖神
長髪の部下くだを巻く年忘れ

川口 新井のり子

焙煎の香る地下街冬初め

さいたま 穴戸洋子

小六月洗濯物に日の匂ひ

さいたま 小駒さち子

みちのくの薄ら日透かす木の葉雨

小春日や話の弾むクラス会

木の葉舞ふ隠れ家めきしジャズ喫茶

山茶花や紅を辿れば母の庭

土手に塗る味噌香ばしき牡蠣の夜

山茶花やこぼるる先の通学路

江の電の窓に小春の海あかり

万両の赤き実ゆるる母の庭

小春日や教師加はる鬼ごっこ

上尾 室井早都子

越谷 阿部幸代

お転婆のまとふ墨の香冬はじめ

秋惜しむ荒磯の歌碑に子守歌

便り待つ郵便受けに木の葉雨

蓑虫の宿りの庭に雨しとど

小春日やひらがなだけでかくかあど

「盆栽の町」の静けさ冬紅葉

月色の牡蠣と葡萄酒ウエヌスの夜

来し方を問ひたき一葉冬紅葉

冬めくや北国想ふ風見鶏

さいたま 平野 楽

さいたま 湯浅 和

居酒屋の柳葉魚の数の割り切れず

傾げさす舞子の蛇の目初時雨

冬の朝遠慮会釈のごみ当番

渡月橋を朧に隠す初時雨

禁酒明け満面に笑み帰り花

「ご一緒」に傘差し出さる初時雨

帰り花人生捨てたものでなし

神の留守背の稚児の泣きやまぬ

肌寒や手作り味噌が食べ頃に

森下美智枝

若狭 松村笑風

鳥避けの網苦心してつるし柿

凧に落ちぬ一葉がんばりぬ

裏年の柿の落葉や二枚拾ふ

空風の吹く上州の湯宿かな

明日網にかかる魚の去年今年

玄関に夫を待たせる初鏡

窓際のカフェの席や冬木立

若狭 森下 風湖

全身にイルミネーション冬木立

力込め冬至南瓜を切り分くる

ふつふつと滾る土鍋や冬に入る

シャンパンの泡シユワシユワとクリスマス

弧を描く鳶の笛や師走空

陽のハグを両手で迎ふ冬菜畑

齒の治療終へて冬日の喫茶店

忙しさに喜び一つ十二月

思惑の半ばを残し年の暮

山茶花や老舗のお茶屋店じまひ

通学路見守るみかん撓なり

バス停へしばらく歩む小春道

さびさびと消防訓練小春風

小春日やガパオライスの目玉焼き

枯葉舞ふバス停までの千鳥足

捨てし故郷無人の駅に枯葉散る

枯葉掃く隣人の復活に安堵

旧友の安否は如何に枯葉散る

初霜や野鳥の餌付け始まりぬ

休日出勤黒セーター軽し

薬喰ひ髭の親父のレストラン

冬の朝高鳴く鳥の群れ去りぬ

達筆を座して眺むる冬襖

二季となる弧状列島冬浅し

さいたま 播磨 進

西川 昭代

忘れてはならぬ人あり冬紅葉
風花や垣根繕ふ修行僧

冬紅葉ダム湖に舟の影一つ

風花や楽しきことを乗せて来よ

小春日や母を誘ひてバーゲンへ

さいたま 樋口 元美

御朱印の滲みの乾き冬めきぬ
炊き出しの顔なじみ増へ冬めきぬ

友の訃に接する夜半や柳葉魚焼く

夫に焼く国産ししやも類ひまれ

設ひやケア施設にもクリスマス

北出久美子

冬暁のとうふ納豆売りの声
大塚駅都電いつしか冬銀河

郷離れし吾子よ今年も石路の花

傘寿喜寿夫婦真つ赤にシクラメン

山茶花の玻璃戸いつばい咲く朝

宮代 関谷多美子

木谷 葉子

大神満智子

今日の幸まるごとつつみ山眠る

川口 加藤みち

百歳を囲み一献温め酒

さいたま 大熊健司

山茶花の垣根を通る通院日

鯛焼を食ふや長袖たくし上げ

山茶花や葉の艶めきて花蕊の黄

長風呂は性に合はぬと湯冷めせり

さいたま 北山建治郎

ドウビッシー聴いてまどろむ冬の夜

駒谷行雄

消防士身を引締めて三の酉

酉の市柝の入る拍子彼方此方で

ハローワーク隙間風沁むる高齢者

冬霞別府湯煙り真つ直ぐに

霜柱手付かず出来たて見つけたり

山茶花の路地の近径猫のみち

小六月ステンドグラスに染むる頬

小春日の落葉松林カフェテラス

波際の吾子ちよこちよこと千鳥追ふ

小川和紙干支午に折る年の暮

稲野幸子

東京 山中いちい

一列に川に向かひて百合鷗

指をさし吾妻言問ひ都鳥

冬浅し何をするにも予約して

助手席でもらひ欠伸や冬浅し

母親を看取りし友に冬木立

目に涙月天心の夜がふける

極月に線香薫る泉岳寺

羽子板に年をあけての夢を見る

熱爛に昔を思ひ独り鍋

東京 桐山遊童

さいたま 石黒由美子

木の葉散る溪の畔の七曲り

扁額の文字の太さや風花す

依代の樟の大木風花す

冬紅葉散る千日行の踏み跡に

初冬や磨き丸太を干す山家

寒菊や山白くなり咲き急ぐ
一日終ふ愛犬に掛く冬菊を
望遠に釘付け眠る鼻居て
宿回り鼻の声の遠からず
鼻や声と羽音に闇動く

さいたま 緒方みき子

にぎやかな句会となりぬ小六月
キッチンカーのチーズたこ焼冬めけり
冬めくや遊覧船の水脈太し
掘削の岩肌あらは冬めけり
海風の抜けゆく軒や柳葉魚干す

さいたま 石井直子

冬紅葉山にひと刷け紅をさし
最後まで燃ゆる一葉の冬紅葉
初霜や寝ぐせ可愛い登校児
手料理は大根づくしや肉恋し
退院の予定の立たぬ小春かな

若狭 佐野友夏

冬めくや砂場にキューピー一人ぼち
冬めくやホッピー割りともつ煮こみ
ぬる爛の良き加減なり柳葉魚焼く
柳葉魚焼く可も不可もなく生きてきて
会へばまた会ひたくなるや冬隣り

門真宏治

小雨降る冬菜畑や風に色
暮早し老いのくりごとごもごと
空つ風昭和生まれで卒寿なり
引売の声高まりて暮早し
捨つるもの山とつまれて大晦日

さいたま 山下ユリ子

冬晴や第九を歌ひ涙せり
煤逃か幼子連れて帰る父
熊撃たれパンダ愛されあはれなり
夫逝きて部屋のうちるや十二月
ゆつたりと手足を伸ばす煤湯かな

大阪 海老名ノルン

ぼろ市や会津木綿の柔らかさ
街路樹も雲もちぎれて冬めけり
車窓より富士くつきりと冬めけり
幼子はししやもの素揚げ手づかみに
軽トラの流すバリトン焼いも屋

三浦真由美

お手玉に興ずる百寿万年青の実
病癒え六腑に浸むる粕の汁
柚の香や心の澱を包み込む
老いて尚サンタ来るかと夢に入る
ライトアップの銀杏並木や夢ロード

和歌山 嶋田洋子

小春日やさあガラス拭きタオル手に
冬晴れやベダル漕ぎゆく土手長し
初雪を冠りて富士の峰高し
家々の明かりが灯り寒鴉かな
クリスマス残りし赤き三角帽

さいたま

三森恵子

菊人形姫の台詞が聞こえさう
絵画展静寂をやぶり鴉猛る
境内の石露の花母の色
こぼれ散る寺の山茶花赤のまま
枯蓮のオブジェとなりし展示館

さいたま

菅原靖子

雲垂れていよ濃くなり山眠る
涙なく読み得ぬ父の古日記
北風に声薄く散る十四時半
風花の舞ひて水面は動かず
深呼吸三寒四温の肺の内

小山あつ子

海上安全祈願神社や海桐の実
海沿ひの熊野古道や海桐の実
白砂やはじめて赤きとべらの実
黒潮の蛇行の見えて海桐の実
赤赤と生きよ生きよととべらの実

小野町子

へび道の小店冷やかす小春かな
小春日やトロイメライの自鳴琴
無住寺に山茶花の散るさりさと
山茶花の蕊残りをり褪せしまま
山茶花の砂糖菓子めく花弁かな

横山礼子

夢に見し友と再会帰り花
したたかに路地裏に咲く帰り花
小春日や届け楽の音ガザの子へ
祖母が縫ふ自慢の晴着七五三
秋深し投稿の種囲み記事

榎本道代

初時雨傘に寄り添ふ初デート
おさまりの散歩のさなか初時雨
近道の境内通る神の留守
篝目の残る参道神の留守
一心に合掌の吾子留守の宮

武田重子

説明はカタカナばかり春の昼
皴消しのヒアルロンサン春さざす
人生の扉が開き春めけり
賽銭の音に目覚むる土筆かな
春の空宮澤賢治の鳥となる

所沢

関根千恵

大根畑太き青くび重みあり
履き慣れし運動靴の七五三
柗の香り幽し夕まぐれ
平らかに過しうれしや晦日蕎麦
懐手して迫りくる親父かな

東京 柳父はる

着ぶくれて動作一拍遅れけり
着ぶくれて散歩する犬飼主も
輝ける父の権威や鍋奉行
一人鍋妻はしやぶしやぶ夫豆腐
除夜の鐘ききて涙腺ゆるむ祖母

東京 清水美千子

ペランダの日当りに果つ枯蠟螂
ことごとこと厨の朝や息白し
出走馬スタート前の白き息
白菜の尻目立たせて特売日
鎌あげて最期のポーズ枯蠟螂

さいたま 鈴木藻好

収穫を土にうづめて夕紅葉
粉を吹く軒の柿祖父の貌
阿修羅像再会するや枯葉舞ふ
波砕け遠近散るや千鳥飛ぶ
海辺風大根干しの七日間

さいたま 糸井しるく

冬めくや好みの土鍋みつけたり
毛糸玉出してはしまひ冬めけり
夕餉には太つ腹なる柳葉魚かな
ぶちぶちと滋味弾けたり焼柳葉魚
柗の花に会ひたき蒼き空

今西 操

冬の朝うす暗き中靴の音
あの世への一里塚冬の道
木の葉舞ふ園児らの声かけめぐる
冬の朝時にふりかへるランドセル
冬月夜横切る飛行機虫のごと

東京 大島千恵

冬散歩にぎりこぶしに息を吹く
記憶力試す買物年の暮
清流の底に色つけ冬紅葉
粕汁や十人十色味深し
冬紅葉筵狭しと乾されけり

和歌山 南條きわゑ

寒椿一輪咲くや茶会の日
床の間に赤白小菊クリスマス
世界中きなくさきま年の暮
投函の音確かむる雪の駅
投票日ぬらりと光る青とかげ

藤沢 小島喜代子

木枯や竿も折れよと波しぶき
木枯に戸を叩かれて長ズボン
酉の市禍福のごみを掻き集め
酉の市不幸を隠す明るさよ
酉の市ごみ箱なくて寂しけれ

草加 持永喜夫

小春空歓声あげて芝滑り

さいたま 田口文子

小春日や干菓子とりどり野点席

からころと海辺の外湯湯ざめして

鬼柚子は飾りじやないよジャムになり

謹呈の『かな女の百句』沓ゆる夜や

大根の葉も一品と今朝の膳

冬の空鳶の羽の丸き紋

白菜漬四パーセント塩かげん

干蒲団日のにほひにつつまれり

鬼石 榊原聰子

海上にひしめきをられ神迎へ

福神漬け多め小春の「喫茶リラ」

檸檬生りたるアパートメント猫眠る

アドベント金の天地の聖書出す

横浜 石井妙子

特集

続×4 令和の新創刊

「オトナリばん」「くらら」
「こなぎ」「燦」「撥条」「なるほど」
「檜山哲彦文学館」「Light like ghost」「Rich」

*今月の華

松村五月／宮崎洋

*巻頭三句

小澤 實／津川絵理子

生駒大祐／津久井紀代

足立賢治／福山良子

*俳句と短歌の10作競詠

垂水文弥＋帷子つらね

*人と作品

称宜田潤市句集

『三河湾』

「泉」吟行記 木本隆行

*わが道を行く
秋山 夢／杉本青三郎

千々和恵美子

*今月のハイライト

「湾」「杉」「繪硝子」

「森」「宇宙船」

*好評連載

浅川芳直

俳壇ランドステープ

成瀬政博

とりあえずの日々

青木亮人
句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一
てのひらの江戸
― 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる
俳句よもやま話

二ノ宮一雄
一望百里



Haiku Shiki

2026年3月号

2月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

作品鑑賞

山本鬼之介

柚子風呂の一個のゆずが近寄らず

飯田忠男

柚子風呂は、冬至の日に、風呂に柚子浮かべて無病息災を祈る日本の風習で、丁子湯・桃葉湯・菖蒲湯などと同様に薬効を期待し、また同時に新たな威力を魂に取り入れるという意味合いがある。江戸時代には銭湯でこの習わしが行われていたらしい。このようなもつともらしい講釈とは関係なく、柚子の皮を料理に添えたり澄まし汁に入れたりして独特の風味を愉しむことは別に、柚子風呂という優雅なムードを味わう全く別の用い方であり、歳晩の一つの葉のようなささやかな行事なのである。

柚子を幾つ入れるかという決りがあるわけではなく、一個でも十個でも二十個でもお好きにどうぞである。さて、作者は何個ほど入れたのであろうか。俳句の内容から察して、五六個は入れたと思うが、若しかすると十個ほど奮発したかも。

作者の身体を取り囲んだ柚子とはまったく様子が違い、仲

間に溶け込めないはにかみ屋の乙女のように、ぼつんと一つ離れて浮かんでいる柚子なのである。

奥座敷小春明かりに木木の影

綿引まりこ

奥座敷という間取りから、この家がかんりの敷地を有し、歳月を経た日本家屋であるように思われる。玄関から真つ直ぐに広縁が延びており、左側は大きな硝子戸、右側は障子戸の和室が続いている。玄関の左手に、昔風の言い方をすれば応接間という洋室があり、一般的な客はここで応対したのであるが、改まった客は奥の間に通したのかも知れない。今では来客も減多に無く、広い家に老夫婦が暮らしている。

快晴の十一月某日、大きく立派な枝振りの庭木の影が硝子戸を透して奥座敷に届いている。ゆつたりと午後の時間が過ぎてゆく。

根深剥くツイッギーの脚懐かしや

反町 修

英国の女優でスーパームデルで歌手であったツイッギー。その小枝のように細い体型と脚で一九六〇年代に名を馳せた。

一九六七年に来日し、日本の若い女性にミニスカート旋風を巻き起こした。その当時作者は何歳であったのか。葱を剥きながらツイッギーを連想したとなると、当時かなり関心を

持つていたのであろうか。因みに、ツイッギーは現在七六歳とのことである。

まづ頬に冬日差したる六地藏 石関六弦

物陰にある六地藏である。其処は、一日の中で日の当たる時間が限られている。冬季であれば尚更であろう。やつとその時間となり、石の六地藏に安堵の色が浮かんだように見えた。細かく観察すればもつと具象的な表現になったであろうが、人に当てはめて考えるなら、頬は顔を構成する上で重要な部位であると思う。したがって「まづ頬に」というフレーズが、句の中で重要な役目を果たしていると言えよう。やがて六地藏が揃って冬日に包まれる至福の時を迎える。

針と糸心愉しき小春かな 霜多光代

硝子戸越しに小春日和の日光がふんだんに射し込んで縁側であろう。久しぶりに繕い物を取り出して穏やかな時間を愉しんでいる。針を替え、また、糸を替えて自分の思い通りに作業してゆく至福の時が静かに過ぎてゆく。

馬籠宿足を滑らす時雨坂 寺町知子

馬籠は言わずと知れた島崎藤村の生地で、長編小説『夜明け前』の舞台となった場所である。馬籠宿は、妻籠宿と共に旧中山道の観光のメッカで、四季を通じて多くの観光客で賑

わっている。

「時雨坂」は、演歌や歌謡曲に同名の曲名が数曲あり、また、実在の坂の名称としては、東京都文京区と神奈川県箱根町に同名の坂があるようだが、馬籠宿には無さそうなので、掲句の坂は、雨で滑りやすくなった馬籠宿の塹の坂という意味であろうと解した。多分作者が以前時雨の時季に訪れた馬籠宿で、実際に体験したことなのだろう。作者の脳裏に染みついている想い出の坂なのであろうが、実によい響きの坂である。

霜の声聴きつつ愛づる銘酒かな 倉田星步

霜が降りる寒さの極まった夜のこと。爛をした好みの地酒をゆつたりと味わっている作者である。庭に降りつつある霜が本来音を発することは無からうが、酒で柔軟になった作者の脳は、それを察知しているのであろう。独酌の作者の相手をする霜の声である。

小春日や古墳の堀は萌葱色 秋谷風舎

堀のある古墳で最も有名なものは、大阪府堺市に在る「仁徳天皇陵古墳」であるが、他にも幾つかある。何れにせよ、堀を有する古墳は、其処に埋葬された人物の権力とその古墳を造った者の技術力の高さを示すものであろう。さて、本句の古墳が何処に在るものかは判らぬが、想像するに、作者の居住地に比較的近い場所にある小規模な古墳で、堀の跡はある

が中に水の無い空堀の状態で、中は草に覆われているように思える。萌葱色と表現した物は水の色ではなく、草の色かと思ふが、何れにせよなかなか優雅な趣のある俳句である。

山城の銃眼抜くる神渡し 皆川更穂

嘗ての山城の跡に残されている堡塁にある銃眼であろうか。今では其処に火縄銃を構えて狙いを付けている足軽の姿を想像するだけのむなししい銃眼である。その穴を、「神渡し」という優雅な名の風が吹き抜けてゆくという作者ならではの発想の妙である。

出雲発寝台特急極月へ 森下山菜

サラリーマンの頃、東北方面や九州の顧客訪問で夜行寝台列車をよく利用していた筆者にとつて、現在日本で唯一定期運行している寝台特急列車「サンライズ出雲号」には大変愛着を感じる。東京と出雲市を毎日一往復している列車で、個室寝台が主体であるからゆつたりと旅の気分を味わえ、人気が高くチケットが取りにくいと聞いている。蚕棚のような昔の三段ベッドの夜行寝台車とは月とすっぽんの差がある。

さて、下五の「極月へ」の意味は如何に。出雲発の寝台特急が今、霜月から師走へ極月へ向けて出発したのだと解した。乗客の中に作者も居て、出雲大社に居残っていた神々の中の気の合った神様と一献傾けながらの帰京である。年末年始に

かけて神様も忙しくなる。

潔く布団抜け出す主婦の朝 本橋稀香

一月の寒の入りと共に寒さが厳しくなり、大寒を迎えて更に寒気が増す。夜間から霜が降りた早朝に、暖かい布団から抜け出すには勇気が要る。あと十分、あと五分と躊躇いつつえいやつと布団から抜け出す。一家を差配する主婦の意地なのである。

古地図手に街道ひとり神の留守 田中弘子

古地図とあるからには、江戸時代の町割を示した地図であろう。其処が昔の宿場町であれば旅籠の屋号や本陣や脇本陣の場所など、当時の様子が判って面白い。城下町であれば城のあった場所や武家屋敷の跡地などを辿りながらいろいろと想像を膨らますことが出来る。十一月のよく晴れた日に、独り気儘に散策する楽しい様子が届いてくる。

二二・ロツソ響く路地裏寒昴 元田亮一

イタリア出身のトランペット奏者で作曲家の二二・ロツソ。「トランペットの詩人」の愛称で親しまれていた。一九六四年に発表された「夜空のトランペット」が大ヒット曲となった。真冬の夜空に輝く牡牛座のプレアデス星団を仰ぎ見る作者の耳に、若かりし頃夢中になっていた二二・ロツソの

トランベト曲が高らかに響いてきて嬉しくなった。何処かの家で自分と同じファンがニ・ロソンのLPレコードを聴いているのであらうと思いつつその路地を後にした。

山茶花や誰にも言へぬことひとつ 前田夏野

人間誰しも、自分の心の中にじっと秘めておきたいことが一つか二つはあるであらう。堪えきれずに誰かに打ち明けてしまいたいという衝動に駆られることもあるが、じっと耐えている。作者は、その気持を山茶花に託しているのだらう。その秘め事をもしも打ち明けたなら、自分の心が千々に乱れるのである。

年の瀬や髪形粋な担当医 丸屋詠子

作者は、昨年九月不慮の事故で右の上腕部を骨折し、手術後に年末までリハビリに通っていた。この句の粋な髪形的人物は、多分リハビリの担当医なのであらう。リハビリの辛さが、医師の素敵な髪形を見ていて軽減されたのだらう。

枯野宿 竈火照らす顔の黙 小林京子

筆者が所持している歳時記で角川俳句大歳時記と講談社の日本大歳時記に、「枯野」の傍題として「枯野宿」が載っているが例句は無く、他の歳時記を数冊繰ったが傍題も無く例句も見当たらなかった。さて、「枯野宿」をどのように捉えればよいのか。「宿」には、「家」「住処」という意味もある

ので、本句については、枯野に隣接した土地にある家と理解してよいかと思う。未だに竈を使って煮炊きをしているのか、口を結び顔を赤らめて竈の火加減を見ている真剣な顔が見えてくる。

木枯の吹き残したる月白し 菅原真理

初冬に吹く強い北風を意味する木枯＝凧であるが、樹木に残っている木の葉や地に降り積もった葉を吹き飛ばし、人々に冬の到来をしっかりと印象づける。見上げる夜空には、地上を照らす月が皓皓と輝いている。

棟上げの祝詞高らか小春空 岡田宣子

近年では殆ど見掛けなくなった棟上げ式の様子を詠んだ俳句である。空が晴れ渡った十一月の嘉日、神主の祝詞が高らかに唱えられ式が進行する。施工者は無事に工事が進むことを願い、その家の家族は出来上がる家に思いを馳せる。和やかな時が過ぎてゆく。

仕事終へ魅入る師走の駅ポスター 杉浦千祐

年末を迎え職場も日々忙しくなってきた。疲れた我が身を励まして自宅の最寄り駅に帰ってきた。駅には色彩豊かな旅のポスターが貼られている。その一枚一枚に魅入るが、今の自分には……と、帰宅を急ぐのであった。

水琴窟

(水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

龍神の手水ふくみて秋澄めり

西窪弘子

雨・水をつかさどる神として龍をあがめる。御神水にはその「龍神」の水口があるのであろう。「手水」を使うには手順があるが、それはさておき手を清めてから口にふくんだのだ。厳かな神社に参り気を落ちつかせる態度が心地よく、読者の身も畏まる。「秋澄めり」の季語がひきしめている。

よそ行きの顔のある妻雁来紅

鈴木藻好

「よそ行き」は、よそへ出かけることで、外出用の服装の意が強い。そうした普段とはちがう「よそ行きの顔」で出かける準備をしている妻の気持ちの微妙な変化に気づいたのである。雁が来るころに紅くなることから「雁来紅」と言われる葉鶏頭。妻の心情の変化との取り合わせが絶妙である。

新蕎麦や峠を越えて訪ねけり

播磨 進

俗に「蕎麦っ食い」と言われるように、蕎麦、とくに「新蕎麦」には噂の名店を訪ねる人も多い。町外れのぼつんとあがる蕎麦店であらう。俳句では「や」「かな」「けり」などの切れ字の併用は避け、「訪ねける」としてはいかがか。

洗濯の隠しに椎の実が一つ

森下風湖

子のズボンを洗ったのであろう。その昔は、洗濯機ではなく、手で洗っていたものだ。ごしごしと力を入れて洗っているとポケットに何か入っている。確かめると「椎の実が一つ」であった。「隠し」はポケットの古風な言い方である。純朴で活発な子の日常をも想像させられる。素直さもいい。

名月を仰ぐロケット発射場

平野 楽

「ロケット発射場」といえば鹿児島県の内の浦を思い浮かべる。日本人宇宙飛行士が現在も宇宙ステーションに滞在し、研究の成果をあげている。発射場には発射を待つロケットやそれにたずさわる人々、あるいは見学の人も多い。障害物がない発射場は「名月」を観測するには最適の場所なのだ。

新米の重き俵に踏ん張る脚

嶋田洋子

六十キロの米俵を持ちあげるのは困難である。たいがいはいは三十キロ、十五キロ、十キロ、五キロと分けられ店頭に積まれている。「重き俵」を踏んばって持ち上げたのだ。(新米の俵にずんと踏ん張る子)とすると人物が見えてくる。

人生は暇つぶしとやきりぎりす

上野和子

童話の「ありとぎりぎりす」を思い浮かべる。なまけぐせの「きりぎりす」に喩え、「人生は暇つぶし」と戒めているのであろう。逆に、あくせくと働くだけが人生ではないと樂觀しているのかも知れない。「きりぎりす」の季語が心憎い。

千曲川渡る車窓に秋夕焼

横山礼子

千曲川に平行して走る「しなの鉄道」が千曲市で交差し鉄橋を渡る。そのあたりで西向きの列車が北へと向きを変える。折しも「車窓に秋夕焼」が鮮明に見えてきた。その光景に感動しているのだ。新幹線ではこの光景に遭えないであらう。

気兼ねなく喫煙郷の端居かな

北出久美子

昨今は喫煙するのにも一苦労なのだ。室内はもとより街頭でも禁煙が徹底されていて、たばこを吸う場所がない。夏期休暇で故郷に帰ってきた。生家は昔ながらに長閑で落ちつく。「気兼ねなく喫煙」し、心おきなく「端居」を楽しんでいる。

運動会我が子を見つけし緑のくつつ下

三森恵子

運動会で活発に動き回る子の中、「我が子」を見つけるのが大変だ。そこで他の子と違った「緑のくつつ下」をはかしたのだ。〈運動会の吾子のくつつ下濃き緑〉で字余り解消。

螢草風の便りに友の訃を

武田重子

「螢草」は「露草」のこと。螢は露と同様に人生のはかなさに喩えられる。竹中す、き女は（露草に亡き子よしばし来て遊べ）と詠んでいる。露草のように各地に根づいている友。「風の便りに友の訃を」知って哀しみ悼んでいるのだ。

背の丸き母の手に鎌苺の花

菅原靖子

晩夏から初秋のころ、白色の小花を半球状につける。苺は食材として欠かせない。背中の丸まってきた母は畑を耕しいろいろ作物を作っている。今日は「苺の花」を採ろうとしている。順当な描写に留まらず語順を変える工夫をすすめる。

新米を掬ふ父の手黒光り

太田 貴

猛暑や渇水、大雨などで米の出来が心配された中、秋を迎えて稲刈り、稲架掛け、脱穀と農作業は続く。ようやく「新米」を手にして安堵しているのだ。「父の手の黒光り」に、父の逞しさ、農作業の厳しさが象徴されている。

意見言ひつつ煎餅を割る良夜

石井妙子

何かの寄り合いであろう。お茶菓子に用意された「煎餅」。気兼ねなく忌憚のない意見を交わしたと「良夜」に表われている。「賛同を得て煎餅を」と、もう一步踏み込みたい。

網野月を選

山紫集

緞通の刑務作業や冬霞

平野 楽

風消して時を止むるや冬霞

秋谷 風舎

望郷の秩父嶺つつむ冬霞

井上 玲子

山里が名画となるや冬霞

西幅 公子

——以上時選

冬霞励ます言葉通じけり

南條 さわゑ

冬霞四囲の山々穏やかに

野口 和子

畑遠く秩父の山や冬霞

野村 美子

目を細め背筋伸ばして冬霞

畑宮 栄子

月光のしみる家路や冬霞

原田 自然

立ち並ぶ赤きサイロや冬霞

原田 秀子

冬霞バイクの光街の音

樋口 元美

冬霞鯉のくちびる透きとほる

梅澤 輝翠

冬霞沈み橋ゆく選挙カー

菅原 卓郎

冬がすみ防災無線から「野バラ」

洪谷 きいち

冬霞近くて遠き国境

日高 道を

冬霞脱ぎし筑波に高き空

丸山 マスミ

軒下の薪積み上がる冬霞

本橋 稀香

絹糸のたなびく村や冬霞	檜鼻ことは	冬霞階段国道を上り下り	持永喜夫
冬霞浮きて走るやLR T	福田千春	はつとして肩引きをせん冬霞	元田亮一
冬霞爆音近きモトクロス	保坂翔太	街角の花舗の賑はひ冬霞	森 和子
高層の棟それぞれや冬霞	前田夏野	冬がすみ消失点にチンドン屋	森下山菜
冬霞ぬつと出でたる盲導犬	曲淵徹雄	冬霞たなびく山を目指す我	森下美智枝
冬がすみ岬の馬を包みけり	正木萬蝶	高階に望むふるさと冬霞	山岸久美子
甦る古墳の辺り冬霞	松宮保人	冬霞クレーンの牙動き出す	山下ユリ子
競りあとの港の市場冬霞む	松村笑風	冬霞スカイツリーのうす雅	山戸美子
江ノ島はあの辺りなり冬霞	丸屋詠子	冬霞もうすぐ来る誕生日	山中いちい
徳利を浮かぶる湯船冬霞	皆川更穂	冬霞ビルの林が宙に浮く	湯浅 和
停留の小舟束ぬる春霞	宮崎チアキ	影絵めく筑波二峰や冬霞	横山君夫
通勤の旅路めく朝冬霞	室井早都子	清けしは君の口紅冬霞	横山礼子

砂山の頂上狭し冬霞	吉川拓真	冬霞村に一つの飲屋の灯	石田慶子
まぼろしの街に鐘の音冬霞	綿引まりこ	暁の光吸ひ込む冬霞	糸井しるく
天命を誰に預けむ冬霞	青木鶴城	冬霞休耕田に唯一人	上戸千津子
一村を静かに包む冬霞	新 曆文	冬霞少女のスキップ軽やかに	内田恵子
湘南の海に白帆に冬霞	阿部幸代	光るダム湖に村の追憶冬霞	梅澤佐江
冬霞墨絵ぼかしとなる家並	荒井俱子	冬霞首輪の鈴のりんと鳴り	遠藤人美
新しき表札の文字冬霞	新井のり子	松島の島を浮かせて冬霞	大場順子
男体の裾野を隠す冬霞	飯田忠男	都電より灯の副都心冬霞む	岡田宣子
波しづか三保の松原冬霞	池田珪子	差出す手何も語らず冬霞	川島夕峰
鳳の視界遮る冬霞	池田雅夫	横丁に数多の言語冬霞	北山建治郎
再開発進む一角冬霞	石川理恵	冬霞晴れて牧には楽流れ	熊倉千重子
主翼より垣間見る町冬霞	石関六弦	冬霞社は山の上に浮き	倉田星歩

チェロ背負ひ橋渡る彼冬霞

河野はるみ

みちのくの山山いだく冬霞

杉浦千祐

冬霞富士ぼんやりと赤くなり

小駒さち子

冬霞電車よろよろ入線す

鈴木藻好

羽衣の裾曳く如き冬霞

小林京子

穴太衆の石垣高く冬霞

鈴木玲子

冬霞フェードアウトのやうに消ゆ

小山あつ子

富士堂々湖の港の冬霞

関谷多美子

キューポラをしのぶ街角冬霞

近藤徹平

霊峰の男体・女体冬霞

染谷風子

冬霞句友の家はあのあたり

榊原聰子

冬霞北山杉の墨絵かな

反町 修

冬霞この道妣の散歩道

笹本啓子

妹の面影よぎる冬霞

高橋満耶子

在りし日のあまた思ひ出冬霞

嶋田洋子

川下の隠るる橋や冬霞

武田重子

始発バス友見舞ふ日の冬霞

清水桂子

晴間待つ鴉も飛ばぬ冬霞

田中章嘉

畦道で古墳と出会ふ冬がすみ

下川光子

横丁は煮豆の匂ひ冬霞む

田中弘子

山寺の老師の背の冬霞

霜多光代

山裾なる無人の実家冬霞

寺内洋子

秩父近くて遠し今日の日冬霞

菅原真理

冬霞畑の緑の息遣ひ

寺町知子

飛永 鼓

山紫集作品評

網野月を

冬霞鯉のくちびる透きとほる

梅澤輝翠

視覚と心象の句である。季語「冬霞」は全体を白濁させるものなのか、それとも視覚的把握の中心点より遠景をかき消すものなのか。筆者は後者であろうと考える。「冬霞」は気象学の用語ではなくて、表現の上での特に文学表現の上での言葉である。この句の場合、「冬霞」は、作者のいる環境、つまり時間や空間を設定するものであり、視覚的把握の中心点を決定するものではない。そして別途、他所に「鯉」の存在が設定されている。「鯉」の存在は、むしろ全く遠隔の場所でもないし、脳裏にある景でもない。むしろ「冬霞」以上に作者にとってリアルに把握できる距離感を保っていると言つて良いだろう。あとは「鯉」をどのように鑑賞するかであるが、生物としての「鯉」でもよいだろう。季節の循環の象徴として、または「鯉」の生態と作者の心象領域の組み合わせとしても鑑賞できるだろう。また作者は大層な料理家でもあるので、食物としての「鯉」として解釈しても面白いかもしれない。そうすると上五の季語が俄然、句の主役に躍り出ることにあるだろう。

冬霞沈み橋ゆく選挙カー

菅原卓郎

「沈み橋」とは所謂「沈下橋」のことである。その「沈み橋」を「選挙カー」が渡っている。加えて、「冬霞」が橋も車も押し包みやがて見えなくなっているのだろう。ダメ押しのよいうな相互の関係性を有する三つ物の構成である。この候補は当選できるのであろうか、他人事ながら気がかりである。

冬がすみ防災無線から「野バラ」

渋谷きいち

意外性の句である。シューベルトか、ウエルナーか、シューマンか。たぶんシューベルトであろうと想像する。そして些か無粋な「防災無線」が「冬霞」という文学的把握と「野バラ」という有名な音楽作品を結びつけている。実景であろうけれども、何とも思いがけない状況が作者を翻弄しているようでもある。

冬霞近くて遠き国境

日高道を

一般的には季語「冬霞」は、遠景を描写するものである。が、掲句は他の側面も含んでいて、その分奥行きのある句意を感じ取ることが出来る。季語としての「冬霞」の効果と、また時空間の拡散と収斂を描出する「冬霞」の本質を合わせ持っている。「近く」は物理的な把握であり、「遠き」は心情的な把握であろうことは自明である。S.N.Sは反対の感覚を呼び起こすこともあるのだが、それでは文学にならないのである。

「くにざかい」は江戸時代のそれを想起させることもあろうが、ここは地球規模の「国境」をどうしても考えてしまう。

冬霞脱ぎし筑波に高き空 丸山マスマ

富士山と同様に筑波山も冬の関東平野では抜きんでて美しく見える御山である。さいたま辺りからは、太陽光の関係からか午後になってくつきりと見えることが多い。その筑波山に「冬霞」が架かっていたのであるが、いま将に脱いだ、と
いうのである。そしてその美しい稜線を拜むことが出来たのである。作者の視線の半分から上は冬空が広がっている。何とも気持ちの良い景である。擬人法が巧みに使用されている。

軒下の薪積み上がる冬霞 本橋稀香

隣家の景か、もしくはどこか旅先での景かもしれない。つまり「積み上がる」を自動詞として使用しているのであって、少なくとも作者ご自身の働きによるものではないということである。自家の景だとしても家族のうちの誰かの働きということである。この他力によって「積み上がった」軒下の薪」と作者の関係性というか、その両者の距離感を座五の季語「冬霞」が包み込んでいて、統一感のある句に仕上げられていると考える。叙景句でもあるので、配合の句として鑑賞して、上五中七と座五が対立しない構成の句である。

緞通の刑務作業や冬霞 平野 楽

上五中七の句意は作者が聞き知った情報なのであろう。いわゆる取合せの句であって、座五の季語「冬霞」と句意との関係性の解釈はある程度読者に任されている句である。「冬霞」の季語の本質の奥深さを感じる句である。

風消して時を止むるや冬霞 秋谷風舎

上五の「消して」の主語は、何であろうか。筆者は神の業であろうと思う。風を消して暫しの間「冬霞」を留めているのである。それは恰も「時を止むる」ことになった、ということである。「消して」は意表をついている。神ならではの作業である。

望郷の秩父嶺つつむ冬霞 井上玲子

作者の視座は、たぶん秩父盆地の中ではないだろう。つまり「秩父嶺（ちちぶね）」の外郭を遠望しているのであろう。あの「秩父嶺」の向うに作者は、故郷の秩父を想像しているのである。そしてその「秩父嶺」を「冬霞」が包んでいる。微かにしか稜線が見えない分、尚更に「望郷」の心を強くするのである。山川に故郷を思うところは、古くからあるのだが、現代でも息づいている日本人の心である。

山里が名画となるや冬霞 西幅公子

日本画の〈場面転換〉もしくは〈時間の流れ〉などの描出方法に使用される雲を想起した。屏風絵などでみられる用法である。とすると作者が「冬霞」の中に見出した「山里」の空間的広がりやの把握と悠久の時間の認識が、両立しているということである。「名画」という見立てになるのである。短詩である俳句にすることでの〈風景の省略〉は言うまでもないが、あくまでも俳句による叙景であるので、〈華やかさの演出〉や〈天を表す〉ことには至っていない。あくまでもモノトーン的な景の把握である。

俳誌望見 梅澤輝翠

「小熊座」

令和七年十二月号 第四十一卷第十二号
主宰 高野ムツオ 発行所 多賀城市

一九八五年佐藤鬼房が塩竈市で創刊。二〇〇一年から高野ムツオ主宰「人間風土の尊厳を思い詩性の昂揚をめざす」俳句結社では主宰者や先輩に学んで作品の向上を目指すのですが、小熊座では自らの生活や社会における立場を大切にして創作に励み自己研鑽を重んじる点が特徴です。月刊

主宰句 露の原 十句より四句

朝顔の蔓が銀河に触れている

秋風に乗り損ねたる甲斐性なし

目鼻耳みんな動かして柿を喰う

肋骨ありて弾むや露の原

一句目 地上の朝顔の蔓が夜空の銀河まで伸びている。朝顔は別名牽牛花。七夕の牽牛（彦星）と織姫の年に一度銀河で出合う物語。そんな事を思いながら地上の願いが天に届く事を願う。

三句目 目で美しさを鼻で匂いを耳で柿の話の確かめ、大好きな柿を慈しみながら、秋の空に向かって大きな口を空け

ガブリと頂く、そんな至福の一時が浮かびます。

極星集（同人作品） 十七名 各五句から二名

仰臥して幾度眠りし夜長かな 渡辺誠一郎

もの申す暗さ月蝕もて知りぬ 津高里永子

海嶺集（同人作品） 三十五名 各四句より二名

擦り減りし「開」のマーク秋晴る 佐藤成之

雪の夜の指に飢えたるピアノかな 吉野和夫

海溝集（同人作品） 四十七名 各四句より二名

鶉鳴けや己が闘志の消すまいと 大河原真青

微動だにせぬ猫おりて彼岸花 水月りの

小熊座集 ムツオ選 八十名 各三句より二名

ロケットとぶ三日月形に子は寝返り 山本 勲

秋の蚊の後シテのごと現れり 林 喜久子

小熊座四十周年記念座談会その2 若手同人五名の座談会 信頼のおける大人達が、若者の個性を潰したりせず、成り立っている場はやっぱり上質なグループだなと、俳句は自分一人でやれるし文字と向き合っても作れる文芸だけれども、人とリアルに関わっていく場として小熊座はいいところ。自分の中に譲れない表現したいものがある人や私の強い人にとって、それを否定するような人は居ない小熊座は居心地がいい。自分が表現者として独りよがりにならずに、勉強していく場としてはいい。と締め括っております。

句集喝采

菅原卓郎

◆河瀬俊彦「櫓の音」

ふらんす堂

著者略歴 昭和十八年香川県高松市生れ。平成二十年「遠嶺」入会。平成二十二年「爽樹」創立、編集委員。平成三十一年「爽樹」幹事長。令和二年「爽樹」代表。令和六年「爽樹」名誉顧問。俳人協会会員。

句集名「櫓の音」は古刹の観月会での池の様子と少年期約行時の伝馬船の櫓の音の思い出が綯い交ぜになった「櫓を漕げば楽の生まるる良夜かな」一句から命名。作者は言葉の「窯変」による非凡な句作を目指し励んでおられる。

春耕の鋤き込む海の光かな
右向けと言はれ右向き敗戦日
戯れ言に本音しのはせおでん酒
潮の香を連れて山路へ秋遍路

第三句、どうしても素面では言えない本音がある。おでんを突つ突きながらの一献は同僚との内輪の話か、将又意中の君との内緒話か非常に気になる。冗談を交えてであれば後者であろう。第四句、土佐路から伊予路にかけての景であろう。黒潮の力強い香りを背負い伊予の札所へと只管に歩を進める。鳥帰る誤差なき磁石持つやうに

願掛けの百の風鈴 百の風
金閣の金にとけゆく春の雪

第二句、富嶽三十六景・神奈川沖浪裏であろうか。サーフアーにとつてはこの上ない波で、古くて申し訳ないがダイヤモンドヘッドかパイプラインのエレキサウンドが聞こえて来そうだ。第三句、松陰神社の「願掛け風鈴」が七月の頭に頒布される。ビードロの江戸風鈴が棚に並び東京の夏が盛る。

◆広井和之「覆水」

四季書房

著者略歴 昭和二十一年兵庫県生れ。昭和五十五年「四季」入会、松澤昭、松澤雅世に師事。平成四年「長江を下る」で第九回宅居賞を受賞。「四季」副理事長。現代俳句協会会員。

作者の第二句集。覆水は決して盆には返らないという常識に囚われる事なく多面的に俳句を詠みたいと跋で述べている。旧字体表記に拘りの深さが窺える。

亀鳴きぬコスモポリタン 標榜し
遠近法 歪む 八月路 面電車
覺悟などなくて茅の輪をくぐりたる
紫陽花の骸のままを保ちたる

第一句、嘗てコスモポリタンなる言葉をかかなり見聞きした時代が有ったが、近ごろはとんと聞かなくなつて久しい。季語の斡旋が巧く嵌まつている。第三句、茅の輪の前面に潜る作法が書いて有るが覚えされるものではない。儘よと潜るのである。神の御加護を受けられるかは別として。

お地蔵の片頬剥けて 五月闇
子も親も無垢動物園の初夏
少年に戻る音なりラムネ 抜く
サルビアや町内會に寡婦増ゆる

第二句、子も親もそして居並ぶ動物たちも、初夏の風が戦ぐ動物園では皆穢れなき天使である。昼下がりの動物園には悪役は要らない。第三句、正に的を射ている。玉押しでビー玉を押し下げる。何とも言えない感触とガスの抜ける音。直ぐに半ズボンの子供に戻れる。が今や缶ビールの抜く音に快感を覚える。音は生きた年代を思い起こす起爆剤である。

〈鼓笛集〉 新選者へのインタビュ―

今年度下半期から〈鼓笛集〉は新選者（青木鶴城・日高道を・石井喜恵）を迎えて再出発します。新選者紹介のために以下五項目についてインタビュ―を実施いたしました。

◇最近感銘を受けた、もしくはお好きな俳人・俳句は誰、何句でしようか？

〈喜恵〉閑さや岩にしみ入る蟬の声 芭蕉

静寂の極致かと思えます。岩にしみ入る蟬の声は勿論心にしみ入るのであらうと思えます。

万緑や死は一弾を以て足る 上田五千石

俳諧の基本である今を詠んで永遠を言い留める一句として感銘しました。

傷みつつ桃のかたちをしていたり 池田 澄子

俳句初心の頃この句の深い心象に触れ、私もこの様な句を詠みたいと憧れた一句です。

〈鶴城〉水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る 金子 兜太

抱くときは素手でなければならぬ月 対馬 康子

〈道を〉私が入っているある句会では、現代俳句協会編纂の「新興俳句アンソロジー」で紹介されている俳人の句柄を一人ずつ学んでいるのですが、偶々最近取り上げた「斎藤玄」

氏の「詩は肉声であることを」という言葉は胸に刺さりました。

◇〈鼓笛集〉の水明誌での位置づけ（役割・機能・働き）はどのようなお考えでしようか

〈鶴城〉詩友とは結社に所属しているだけの会員であるのに対して、同人とは結社を支える立場となる会員です。従って同人になれば運営のための同人費を負担することになります。鼓笛集はその同人に投句の機会を与えられた部門との認識をしています。

毎回投句に順位が付けられることで自身の句を改めて評価し精進に繋げて頂くのが〈鼓笛集〉の役割だと考えます。今回選者が三人になったことは、評価の幅が広がったわけで、投句者の皆さんが高い順位につく可能性が高くなります。

〈道を〉「同人」という、いわば相撲でいえば「関取」となれば、これからさらに高みを目指される方々に、「鼓笛集」という「水明集」とは違う「土俵」で相撲を取っていただくことに意味があると思えます。「土俵」が違えばそれぞれの人にとっての新たなチャレンジの場を提供できると思えます。

〈喜恵〉鼓笛集の役割は、何の制約もなしに、唯心を過ぎった風景や事柄を詠む俳句が本当に楽しいと思える様にとだと思えます。

◇俳句における〈季語〉の役割について

〈道を〉「季語」は俳句の先人たちが築いてくれた、俳句独特の「魔法の言葉」だと思えます。僅か十七文字の詩の中に「季語」を取り入れることで詩情を際立たせることが出来ます。「季語」は主役であるとはよく言われますが、作者は「季語」

に何を託そうとするのか? 「季語」の選択が非常に重要であると思います。

〈喜恵〉季語の役割は、季語そのものを詠む。季語を題材にして自由に読むのもあります。

〈鶴城〉水明は「有季定型」を基本としています。俳句にとつて季節感はとても大事なもので、当然〈季語〉が必要です。従つて水明誌への投句は基本的に「有季」とすべきです。但し各句会の場では、遠慮無く無季俳句や破調の俳句へのチャレンジもどんどんやって頂ければと思います。

◇俳句における〈リズム〉について

〈喜恵〉俳句の五七五のリズムは誰もが体内に持っているリズム。淀みなく詠む事が出来れば、心地よい一句が生まれる。

〈鶴城〉俳句のリズム感はとても大切です。リズムが良いとすつと受け入れられるし、披講も楽しい。

〈道を〉「俳句」は声に出して読むとよいと言われます。

「リズム」或いは「調べ」と言われますが、読んでみて「スツと」読める句は良い句だと思います。

◇選者としての抱負をお聞かせください

〈鶴城〉基本的に私は「俳諧自由」を信条としています。固定観念にとらわれない自由な俳句を期待したいと思います。心象俳句やメッセージ俳句が好きです。

〈道を〉自然体で、私の出来ることを精一杯やらせていただくつもりです。自分自身も発展途上だと思います。一緒に切磋琢磨して行きましょう。

〈喜恵〉年々レベルの高さを感じる昨今です。句会では一緒に緒出来ない方々の句に出会える喜びがあり、共に成長出来る

楽しい予感があります。とても烏澁がましいですが、以上今思っているままに。

……新選者の略歴等の紹介に代えて、以上、五項目についての回答をお届けしました。七月号掲載の〈鼓笛集〉は、今まで同様の水明集の同人を対象として、当季雑誌で各一句の投句をお願いする予定です。

(網野月を記)



水明例会



第一例会（浦和）

菅原卓郎報
小林京子報

雪はもののかたちをなさず雪女郎 順子
冬野行く我が心奥に勢あり
愛しくも溶くれば怖し雪女郎 延昭
運勢は母子大吉初御籤 はるみ
駐在の宿直の伽に雪女郎 徹平
歩いて歩いても雪女にはなれず 和葉
白樺の林誰を追ふ雪女郎 千祐
衣擦れの音なき音や雪女 喜恵
——以上特選——
愛の成就か笑みて溶けゆく雪女郎 千祐
紅点してまどろに座れ雪女郎 由紀子
端端に過去の権勢年始酒 延昭

第二例会（東京）

山中みどり報
青木鶴城報

勢力は何方もどつちラグビー戦 和葉
桐箱に館玉足す夜雪女郎 はるみ
威勢よく上段くるり梯子乗り 順子
三味をひき影もてあます雪女 節代
払つてもすぐ纏ひつく雪娘 和子
初日の出伊勢の二見の夫婦岩 徹平
姫街道の関にて消えし雪女 マスミ
着ぶくれてとろりと啜る伊勢うどん 喜恵
勢子声の迫る里山春隣 卓郎
めでたさや勢ひ借りて競ふ独楽 京子
——以上特選——
今日よりは大樹となりぬ灯の点り 妙子
挨拶の満ちて聖夜の礼拝堂
月を見るクリスマス市の灯の中に みどり
黄落の中に侏儒かまろび合ふ
群青の江戸の切子に新走り
家居して窓ひとつ分冬日和
冬うらら十二月八日の胸騒ぎ
冬晴れや色とりどりの熱気球 鶴城
ひととせを映す湖面や冬日和
ダイエットケーキは別腹イブだもの 恵美子
幼子のねだる煙突クリスマス 千春
——以上特選——
冬晴れにガラス無きごと窓を拭く 竺仙
向月台の砂さらさらと冬日和 いちい

冬日和猫の寝姿やはらかし
 クリスマス今日も変らぬ芋焼酎
 逆上り今日は出来さう冬日和
 冬日和窓辺で足の爪を切る
 縁側であやとり楽し冬日和
 ふらふらの脚と寿司折クリスマス

友よりの苞の清酒を鱈酒に
 嬬やかに鱈酒の蓋マツチの火
 鱈酒の蘊蓄語る長州弁
 鱈酒とろり焼け棒杭火が移る

風花や草津の湯場に湯もみ唄
 初富士へふはりと天の薄衣
 風花や薄墨のごと昼の月
 金銀の茶碗めでたき初点前
 風花や幟はためく楽屋入り

第三例会 (東京)

五明 曲淵 徹雄 昇 報

縮こまる影もろともに寒に入る
 山稜の狭間かき分け初日の出
 享年四十位牌の夫に酌む身酒
 鱈酒や花押の滲む軸掛けて
 金蘭の友と鱈酒汲む夜かな
 焼諸屋笛の音色も国訛り
 オリンピアめく鱈酒の点火式

初東風やさやぎめでたき磯馴松
 風花になりて行きたき町一つ
 風花や眼窩に染むる空の青
 風花や香ばしきパン抱き帰る
 風花や足湯に並ぶスニーカー
 風花舞ふモデル歩きで行く少女
 めでたきは曾孫初湯のおちんちん

北国の闇をまとひて鶴眠る
 群れ鴉吸ひ込まれゆく冬夕焼
 寒落暉銀の翼を赤く染め
 冬夕焼稜線黒く切り取られ
 波音を残し消えゆく冬夕焼
 梵鐘の余韻のこして冬夕焼
 冬夕焼成就せざらむ恋に似し

以上特選
 雅夫
 萬蝶
 順子
 昇

鷹達の木遣響くや出初式
 傘寿経て踏み出す一歩初明り
 海津の沖限りなし初茜
 あねいもと無病告げ合ふ初電話
 蒼天や朝日に映ゆる初浅間
 頸伸びし嘶く馬や初御空
 天網の小さき綻び風花す

武蔵野線句会帰りの寒茜
 暮るるまで冬夕焼に見とれをり
 冬夕焼ビルの隙間を彩れり
 冬夕焼心のままに生きし今
 鶴来る湖に安堵の影曳きて
 たまゆらの命燃え立つ冬夕焼

以上特選
 雅夫
 萬蝶
 順子
 昇

翔太
 マスミ
 章子
 修
 恵子
 昇

以上特選
 千祐
 宣子
 はるみ
 夏野
 義子
 佐江

第四例会 (浦和)

石井喜恵 反町修 報

第五例会 (浦和)

梅澤佐江 河野はるみ 報

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子 報

春着しまふ祖母の見立ての豊紙に
年始客変らぬ魚拓誉めて去ぬ
ひろこ

蔵元に春着の子ゐて八代目
慶子

慎ましく柏手二つ春小袖
詠子

冬浪や魚群追尾の舟一つ
星歩

墨香る釣果の魚拓春隣
佐江

家格ゆかしき母の嫁荷の春着かな
萬蝶

——以上特選

禪を締めてかかるや初衣装
京子

鈴生りやパドックに咲く春着の子
星歩

初茜魚柵をたたく修行僧
はるみ

釘読みを狂はす春着遊技場
鶴城

お茶室に凜と会する春小袖
佐江

そよそよと春着の幼通りけり
ひろこ

華やかに春着の異人浅草寺
千祐

お下がりの春着に姉の香を偲ぶ
マスマ

面差しは母にそつくり春着の子
詠子

春着の子恥ぢらひながら見せに来る
慶子

二十日正月夫は終日魚釣りに
千春

魚拓活く寒九の水を掛けられて
萬蝶

昔話あれこれ 54

丸山マスマ

内大臣道隆

酒が好きで、酒に強かった道隆公

道隆公は兼家公の長男である。
関白として六年、疫病大流行の年に亡
くなった。しかし疫病が原因ではなく、
酒の飲みすぎによるものであった。

*疫病が、正暦4年(993)〜長徳
元年(995)の3年にわたって猛威を振
るつた。平安京は死者累々で、遺棄され
た死体で道や堀が埋まった。死者数は「京
師の死者過半」という説もあり、貴族の
死者も多数であった。

ある年、賀茂の祭の帰り(祭のかへさ)
に藤原濟時つとむ、藤原朝光あさみつと同車して紫野に
出掛けた。輿こしに乗り騒ぎながら飲んでい
る内に、度を越して車の前後の簾を皆上
げて三人とも、冠を脱ぎ、鬻うを丸見えの

有様になった。実に見苦しかった。
大体、濟時公、朝光公が道隆公の館を
訪問した時は、しらふで帰すのを不本意
に思い、正体も無くなり、衣服もすつか
り乱れるのを面白がる人であった。

酔いの覚めるのが早かった道隆公

賀茂詣の日は、社前で、三度の盃を拝
するのが、習わしであった。禰宜も神主
も心得ていて、大杯を差し上げたところ、
三杯はもちろん、七八杯も飲んでしまっ
た。そして、上賀茂神社までの途中で仰
のけに寝て爆睡してしまった。神社に着
いたが、道隆公は気付かず、寝込んだま
までである。前駆の者どもは遠慮して声も
かけられない。道長公が気付いて声をか
けるが、目を覚ます気配もない。仕方な
く、袴の裾を強く引つ張るとやっと目覚
めた。そんなことに慣れているので、道
隆公は櫛、笄びんざしを持参して、髪かみの乱れ
を整え、何事も無かったかのように輿か
ら下り立った。
(つづく)

各地句会



阜月の会 (浦和)

微動して鷺の髻刺す寒の水
 冬の霏まほろしのごと一里塚
 寒の水汲むや静かな杜氏唄
 青き月映る手桶や寒の水
 寒九の水溢れて濡るる診察券
 米を研ぐ手をけざやかに寒の水

山菜 光代 珪子 曆文 さいち 更穂

出窓よりソナチネ漏るる冬館
 冬館湖畔の屋並睥睨す
 冬の宴吟じ手のなき祝儀歌

風子 鶴城 修

鶴川山百合句会 (鶴川)

冬至の陽わたしを舐めるやうに入る
 冬至粥母の遣せし大土鍋
 二千二五個の袖風呂息がつまりさう
 年の瀬の夜毎の昭和流行歌
 極楽の柚子湯わたしもカビバラも
 柚子風呂の柚子を十までかぞへをり
 龍神の龍も冬至は寒からう
 ゴッホの黄冬至南瓜の煮くづれて

史代 広子 千春 萬蝶 理恵 美千子 まどか 玲子

青葉の会 (浦和)

振込みの伝票を手に数へ日を
 数へ日やでんと場所とる大き鍋
 数へ日や食料白袋買ひ急ぐ
 冬蝶よ力尽くまで野に遊べ
 年の暮力作揃ふ裂き織り展
 努力報はれ裂織賞の十二月
 数へ日や友ある幸を噛み締めて
 小春日や古刹に今も力石
 数へ日やラジオ体操広き輪に
 数へ日や警察からの詐欺電話

久美子 桂子 美紗子 真理 美智枝 公子 啓子 洋子 輝翠

ミモザの会 (横浜)

左義長の炎ますぐに天を衝く
 年またぐこと無く咲きて冬の梅
 マスクして年齢不詳が闊歩せり
 無垢な眼の神馬迎ふる除夜詣
 どんど焼き火跡に残る子等の声
 擬宝珠に集まる光初日の出
 初春やめでためだの世にしたし
 どんどの火激しきときはみな寡黙
 鎮守社の小さきどんどにそつと焼べ

玲子 慶子 萬蝶 詠子 亜弥子 栄子 美千子 史代 千春

野ばらの会 (浦和)

重さ増す四代目継ぐ沢庵石
 冬の暮幽鬼が黒き暮を引く
 冬の暮たちまち闇へまつしぐら
 冬の暮急に無口に母待つ子
 沢庵石の沈み加減や家の味

夏江 秀子 茂子 栄子 みき子

新樹の会 (浦和)

絹の道の浪漫を画布に冬館
 吟行の庭園まばら冬ざるる

徹雄 清吉

若狭水明会 (若狭)

一歩ずつ嬰兒の歩み冬初め
風の音波の音聞く初冬かな
更新を終えて初冬の信号待ち
木の葉髪風と戯れ子ら笑ふ
木の葉髪昔なじみの理髪店
捨てるより買うもの多し冬はじめ
だんだんと母に似てきて木の葉髪
連れ添うて六十年や木の葉髪
閉ぢこもる老いの生活冬はじめ
初冬や今日は訪問介護の日
初冬や道具揃へる山女
初冬や湯治場行きの旅支度
北陸を生きたる気構へ冬はじめ
星流る父母よりもらふ生と死と

水明澤つくし句会 (大阪)

昭代 和風 初花 初夏 友夏 風湖 笑風 郁子 自然 ことは 風花 保人 祥子 寛久
智恵子 人美 ノルン 洋子 智恵子

夫逝きて部屋のうつろや十二月
プレゼントは「元氣」が一番クリスマス
和歌山水明句会 (和歌山)
記憶より母校小さし鯛雲
樹上よりラジオの声や松手入
鯛雲天主閣へはあと五段
会議へと木枯一号急がせる
狢犬の阿吽の呼吸松ふぐり
式部の実本家の庭をたをやかに
カラフルな軍手賑はふ栗拾ひ
一瞬や蛇わしづかむ青鷹
山は雪どこへも行かずに句三昧
手袋のままの握手で別れけり
一字に迷ひ湯ざめする迄辞書をくる
賑やかにリモート会議冬の宵
鉄骨の足場にすべし大火跡
記憶力試す買物年の暮
柚の香や心の澱を包み込む
落葉掻くをとこ熊手の二刀流
神戸大池句会 (神戸)
六日早や月日の流れ感じをり
一筆を添へて伺ふ寒見舞

ノルン 洋子 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廸代 千津子 早苗

りんどう俳句会 (浦和)

待ちわびて真の山河や白鳥来
雪原の雪の底行く最上川
ランプの灯揺るる秘湯や雪深し
雑踏離れ心静かに冬野かな
大白鳥二羽に傾く湖面かな
日々流転鳴くな白鳥夜が明ける
人もなく風に躡く冬野かな
火の粉吐きD五一走る雪の原
張り出せり北の前線白鳥来
俳句の手ほどき (岩槻)
屠蘇酌んで宇宙旅行の夢に酔ふ
七日粥つつましき香の浅みどり
事件記者追ふや人家の無頼熊
なき人の席もしつらへ屠蘇を酌む
人日の句会の皆の笑ひ顔
機初の明るき糸や箒の音
人日の一件小事「こみ当番」
心沁む昭和歌謡や去年今年
用件を酔ふて忘るる年始客
三階建ての物件並び年始め
きりだせぬ不意の用件寒鴉

君夫 順子 翔太 夕峰 徹雄 まりこ 寿夫 風子 卓郎 延昭 江平 徹子 義男 忠子 美子 幸代 久美子 桂子 知子 卓郎

捨てがたき天動説や初日の出
雪催厨に籠もるシチューの香
熱き掌を握り返して雪催

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

冬ざるる番屋に錆し蝶番

電飾を解かれし樹々の冬ざるる

坊泊り大椀に盛る菜雑炊

少年に少女の混じる喧嘩独楽

冬ざれの津軽の空や撥が鳴る

雑炊噺りはや出立の行者講

あゆみの会 (浦和)

見なれたる雑木林の淑気かな

美しき水の地球や初山河

老いの吾が拝む感謝の初日かな

パーカーの陽の匂ひ背に若菜野へ

初御空青の淡きを鶯の飛ぶ

富士山の全容現はる初景色

蝌蚪の会 (浦和)

百合鷗遊びをる子のほほ紅し

松江へとハーン追ふ旅春を待つ

炭火まで近づけずする煙管かな

翔太

チアキ

かつ子

延昭

俱子

由美子

早都子

洋子

昇

啓子

俱子

重子

靖子

和

藻好

しるく

秀子

風舎

冬晴や日々五千歩を目指すなり

決心と継続は別うつた姫

橋越えて朝日に向かふ都鳥

大川の貸切り船の雪見かな

五七五楽しみますと初参り

百合鷗水上バスの船先立つ

をはりなき旅にさまよひ春を待つ

炭焼きの匂に潜る縄暖簾

円卓の会 (浦和)

咳の子やこの時こそと甘えをり

霜の夜のやまぬ蛇口の雫かな

寒冬下心の言葉紡ぎけり

独り霜夜の紐の無き木偶となる

惚け鳥霜夜も知らで大躰

初句会袋回しの艶の題

ニニ・ロツソ響く路地裏霜の夜

小春日や三味の音洩るる神楽坂

咳払い二つ四畳半の中は

空咳をこほんとひとつ朝礼台

繭の会 (浦和)

御降のやがて雪へと変はりたる

お降りや国旗の球の眩しさよ

ひさの

夏野

幸子

礼子

五郎

元美

月を

宣子

翔太

卓郎

修

拓真

道を

京子

亮一

輝翠

月を

鶴城

小麦

しょうごう

御降りや濡るるも粹に男帯

団欒の時を潤すお降りよ

お降りや濡るる参道人もなく

県境を越ゆれば富士の初西

酒酒酒酒酒酒酒や齋粥

御降りやまつたり磨く銀食器

御降りや青く色づく庭の石

若鮎句会 (浦和)

木枯に押されてくぐる縄のれん

木枯や桶屋の壁にバンクシー

巾着に木枯つめてしまおうか

酉の市ねげ眼のこけこつこう

酉の市B級グルメ食べ歩き

木枯や嗅覚効かぬ病み上がり

木枯や貴方とゐれば寒からず

酉の市禍福のゴミを掻き集め

めだか句会 (浦和)

年忘れビルの谷間に散る笑顔

切株へ時には座して日向ぼこ

冬の陽に千年の時盆栽展

冬至柚子浮かぶ水面の湯気あかり

東北の時折冬の地震が来て

風子

夕峰

寿夫

和子

月を

京子

風舎

真

山菜

ひとみ

貴

秀子

芳春

月を

喜夫

恵美子

六弦

妙子

真美子

章嘉

リモートも時代の流れ年の暮
老いし母訪ね安堵の年忘れ
冬至湯やほろり解ける胸の内
年忘れ全て忘れてしまひたき
デカ柚子を胸にかかへて仕舞風呂
同じ店違ふ顔ぶれ年忘れ

若 枝 句 会 (浦和)

なにもかも洗ひ流すや冬至の湯
通学路塀の初雪撫で下ろし
山茶花や散り敷くすそに輪を描く
山茶花の散りつつ明日もありぬべし
下校時の鐘と暮れゆく冬至かな
初雪の一片肩に吾子帰る

若 楠 句 会 (浦和)

惜別の上野の杜や初景色
枯芙蓉なほも留むる気品かな
除染土を覆ふシートや冬景色
裁判所の長き廊下や冬景色
枯芙蓉湖面にゆるる立ち姿
カラカラと四季なき風に枯芙蓉
この路地に慣れし歳月枯芙蓉
闇に浮く白川郷や冬景色

道代 和子 美津子 月を 三茅 美佐子 みどり 敏江 泰生 泰子 貞代 久美子 風舎 直子 京子 文子 弘子 慶子 葉子

緑側の茶飲み話や枯芙蓉
騒めきや先着順の暮の市
老いてなほ存在感の枯芙蓉
越後の会 (浦和)

長長と講釈聞きて冬の雷
ポインセチア誘ふカフェの窓の席
初雪や墨絵めくなり峡の山
窓辺には夢を呼び込むポインセチア
なごみの会 (浦和)

手相見の灯冬ざれの街角
ひとくさり語りし長や里神樂
白障子妣は背中で語るだけ
語部も若き等につぐ年の暮
雅語を用ふる女房年惜しむ

水明熊谷句会 (熊谷)

枯木みなライトアップのドレス着て
決然と斜陽に立つや大枯木
菩提寺の薨見下ろす大枯木
枯木にもまだ洒落気あり熊野筆
堪忍袋を大きくしたき去年今年
烈風と小銭の入る社会鍋

真由美 鶴城 宏治 輝翠 宣子 翔太 真理 喜恵 かつ子 茂子 和葉 節代 燈女 風子 徹平 秀子 忠男 茂子

お帰りなさいと迎へる笑顔社会鍋
枯木星父の双眼鏡で見る
消え去らぬ老兵いまだ社会鍋
雛の会 (浦和)

水 downstream 深く静かな水の底
風揚げの児を追ふ爺のスニーカー
水 downstream つまみに時を忘るる山仲間
四温晴空の奥までガラス拭く
水 downstream 魚と云ふ文字知る句会冬の午後
木星を追つて寒月空駆くる
国後は日本の領土水 downstream 魚釣

櫻蔭句会 (浦和)

ゆくりなく月も満ちたり去年今年
行く先は見えねど喜寿の大旦
仕舞湯の音立て消ゆる去年今年
寛解の友と行きけり冬紅葉
去年今年厨で器揃へをり
行灯の光に映ゆる初化粧
新年の舞妓行酒の京の町
激動の時代とともに去年今年
行商の荷に七草の春を買ふ
餅焼いて夫婦の会話膨れ行く

栄子 道を 卓郎 喜恵 輝翠 公子 燈女 桂子 佐江 由紀子 多美子 公子 美智枝 真理 千恵 美子 久美子 行雄 茂子

初雪の消え行く路地の空の青

幸代

短日や辞書の余白に父の文字

かつ子

芙蓉句会 (浦和)

税子

野菊の会 (与野)

美代子

口ほどに熊を憎まず実南天
短日や落日追ひかけどきどきす
防災無線より「故郷」や実南天

節代

参列の喪服の背に雪の絮
浮鳥や肩寄せ仰ぐ北の空
友逝きて飛ぶ水鳥の声化し

仁

満目の糴田車灯は火の玉ぞ

和子

りそな俳句会 (浦和)

和子

たかな俳句会 (川口)

美子

干し柿の色よし粉の噴き加減

清子

初戎一番福を取りに行く
餌探す街の鳥の三が日
初読経飛鳥大仏伏し目がち
乳菌抜けふはふはふはと初雑煮
生かされて老を諾ふ初鏡
人目にもおしどり夫婦年酒酌む

道

それぞれに冬の歩幅や沼の道
散歩道一点白き冬の蝶
おでん酒友在りし日を目交に
冬の川石投げ競ふ元少年
緋鳥鴨朝の川面に濔描き
立ち寄れば言はずもがなのおでん哉

のり子

冬の月兄亡き里へ行く列車

千重子

山茶花 (浦和)

久美子

きざきサークル (浦和)

みち

不夜城や仰げば白き冬の月

修

深ぶかと喪の家つつむ冬の月
椀の香もひそかな私語も冬の月
冬満月少し和らぐ痛みかな
地下足袋の柄にもキティ西の市
残る葉の茜一入冬の朝
友の里お久しぶりのからつ風
熊鈴の響く夜道や冬の月

マスミ

行けぬまま世界遺産の古暦
古暦佳き日を記す赤き丸
メモ数多捨つるに惜しき古暦
冬日和唄ひだしそな童子仏
冬晴るる門太き大手門
口笛の抜けゆく空や冬日和
寒晴や波音だけの九十九里
木の瘤に潜む力や冬日和

義子

芽吹句会 (浦和)

玲子

富子

マスミ

おでん酒友在りし日を目交に

小麥

冬の月兄亡き里へ行く列車

ひろこ

初暦やはり日めくり好みなり
句会日を先づ書き入るる初暦

美江子

きざきサークル (浦和)

鶴城

深ぶかと喪の家つつむ冬の月

弘子

山茶花 (浦和)

マスミ

行けぬまま世界遺産の古暦

由美子

椀の香もひそかな私語も冬の月

久美子

山茶花 (浦和)

マスミ

行けぬまま世界遺産の古暦

啓子

冬満月少し和らぐ痛みかな

チアキ

山茶花 (浦和)

裕誌

行けぬまま世界遺産の古暦

俱子

地下足袋の柄にもキティ西の市

道

山茶花 (浦和)

裕誌

行けぬまま世界遺産の古暦

和

残る葉の茜一入冬の朝

久美子

山茶花 (浦和)

裕誌

行けぬまま世界遺産の古暦

健司

友の里お久しぶりのからつ風

和葉

山茶花 (浦和)

あつ子

行けぬまま世界遺産の古暦

満智子

熊鈴の響く夜道や冬の月

章嘉

山茶花 (浦和)

千重子

行けぬまま世界遺産の古暦

和子

柿の木塾 (浦和)

和葉

山茶花 (浦和)

あつ子

行けぬまま世界遺産の古暦

満智子

真すぐには歩かぬ犬や日短し

昇

山茶花 (浦和)

朋子

行けぬまま世界遺産の古暦

和子

短日や動く歩道を急ぎ足

章嘉

山茶花 (浦和)

千重子

行けぬまま世界遺産の古暦

和子

新春俳句大会の記

青木鶴城

連日の寒波が少し和らいだ二月一日の日照りの午前中、浦和コミセン第十四集会所に於いて、令和八年度の指導者及び幹事の会、午後はさいたま共済会館に会場を移し新春俳句大会が開催されました。

指導者及び幹事の会には五十名を超える参加があり、句会幹事の役割、今年度の事業計画、コンプライアンスのこと、未発表作品の定義、句会報告は十五日締めに関係なく速やかに提出すること等々が伝達されました。

新春俳句大会への出席は五十名、兼題の「冬夕焼」及び「初鏡」で作品を競いました。

選句

主宰は多選

副主宰は二〇句選

雪欄作家は十句選

一般は五句選

披講

日高道を
菅原卓郎

主宰詠

冬夕焼の終はる海峡独り旅
蓄へてみるか美髯を初鏡

主宰選

三極(天・地・人)

天

初鏡モナリザの笑み真似てみる

君 夫

山の子の筈と遊ぶ冬夕焼

人

米寿に誓ふラストスパート初鏡

超特選

単線の町はポエムか冬夕焼

冬西戦艦大和の眠る沖

アトリエの未完の絵画寒茜

寒茜富士がふかむる孤高かな

紅をさし仕上げは笑顔初鏡

見入るほど幻めきて初鏡

冬夕焼静かに染まる門前町

特選

初鏡仏頂面に戻る笑み

寒茜正に埼玉(さきたま)古墳群

冬西ずしりと重き富士の影

品格ある老後へ正す初鏡

富士額は曾祖父譲り初鏡

待つ人の居て幸せの初鏡

初化粧目許艶めく泣きほくろ

齢九十女盛りと初化粧

桃青や面白山の冬夕焼

寒茜に染むるたちがみ岬馬

冬西富士の雄姿を浮かばせり

けんかして丸窓にある冬西

しみ皺も佳と眉引く初鏡

義子

桂子

慶子

マスミ

町子

由紀子

栄子

泰生

亮一

徹平

昇

京子

順子

喜恵

風子

月を

卓郎

久美子

輝翠

真由美

一歳の子と笑顔で覗く初鏡
 冬夕焼天を突き刺す塔ふたつ
 ふくよかに産後の妻の初鏡
 白頭へ活入れなほし初鏡
 初鏡バーコードの髪を切る

普通選

皷顔は吾が勲章や初鏡
 マチスめく妙義浮かせる冬夕焼
 冬夕焼路面電車はセピア色
 手もとまで冬夕焼の手紙出す
 初鏡もう一度見て出立す
 寒茜青き地球の足掻きかな
 かんばせの皷も年輪初鏡
 適職かお堀端なる冬夕焼
 冬夕焼小さき影のむ大き影
 喜寿の妻背筋を伸ばし初鏡
 加速する老いの身じつと初鏡
 家中の顔抱きしめる初鏡
 鐘の音の流るる街や冬茜
 歩き初めの幼ランラン冬茜
 君がゐて富士包まるる冬夕焼
 生き死には人の天命寒茜
 初鏡まだまだ行ける紅をさし
 初鏡皷の数ほどエピソード
 この先もつかずはなれず冬夕焼
 あるといふ西方浄土冬夕焼

美智枝 道蝶 萬雄 鶴城 鶴城 風舎 夏野 千祐 栄子 義子 卓郎 ひろこ 更穂 久美子 輝翠 真由美 美智枝 泰生 延昭 公子 葉子 萬蝶 千春

攻め掛くる高樓の端冬夕焼
 冬夕焼祖父と手繋ぐ日の来しや
 初鏡小引出しからぼち袋
 初鏡夫の靴下色ちがひ
 冬夕焼友見舞ふたび見るたびに
 東の間の今も青春寒茜
 駅舎染め紅富士さやか冬夕焼
 初鏡覗き来し方思ひ遣り
 林立のビルを影にす冬夕焼
 心の臓高鳴る少女初化粧
 高層ビルの競ひ合つてる冬夕焼
 しわよりも赤み生傷初鏡
 愁ふ身に着火されたや冬夕焼
 初鏡あな恐ろしや吾子十二
 帯結ぶ母振り向きて初鏡
 向きあひて本音をばそり初鏡
 冬夕焼口笛吹いて胸張つて
 里染まり母の呼ぶ声冬夕焼
 初めのお太鼓結び初鏡
 髪梳きてくるる子とをり初鏡
 初鏡背に返りみる帯姿
 佇めば黙の波うつ冬夕焼
 天と地の間にハート寒茜
 遠富士の葉山の海や冬夕焼
 誰のため気合十分初鏡
 吹切れて決意の真顔初鏡

徹雄 拓真 慶子 月子 君夫 順子 知子 道子 章子 翔太 京子 洋子 桂子 進子 町子 夕峰 喜恵 風子 マスミ 由紀子 宣子 真理 はるみ しろく 亮一 チアキ

取り返しのかかぬ一言冬茜 鶴城
 互選及び主宰選の披講の後、天・地・人の
 三極には主宰より色紙、超特選には短冊が授
 与され、互選による高得点者には水明より記
 念品が贈られました。
 高得点者
 一位 菅原卓郎
 二位 大場順子
 三位 染谷風子
 四位 丸山マスミ
 五位 秋谷風舎
 六位 小野町子
 七位 森川義子
 八位 五明昇
 表彰の後、主宰より講評を頂き予定の時刻
 通りに終了しました。今回も三名の初参加が
 あり、見事に主宰の超特選句に選ばれる快挙
 がありました。今後も初参加者がどんどん増
 えることで、水明の更なる活性化に繋がれば
 と願うところです。
 三極及び超特選、また、高得点を取られた
 皆様おめでとうございます。

生きる

青木鶴城「水明」

冬の湖深淵に時沈みゆく
 柏手に成就の行方梅白し
 春の雪祈りをいくつ数へたる
 決心はいつも空振り浮かれ猫
 疾走に疲れ果てたる風車
 生きるとは迷ふことなり蜷汁

あおき・かくじょう
 1949年佐賀県唐津市生まれ。
 「水明」常任運営幹事・事業部長。
 新珠賞、水明賞、季音賞受賞。
 現代俳句協会監事。

令和8年水明全国大会のお知らせ

■全国大会・親睦会

[日 時] 令和8年6月28日（日曜日）

[会 場] さいたま共済会館

[行 事] ・水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞
の表彰

- ・新誌友の紹介、新季音同人、新同人の発表
- ・大会兼題入選句の発表、表彰、講評等
- ・親睦会

※大会・親睦会のスケジュールおよび参加費等の詳細については
4月号、および5月号にて改めてご案内いたします。

水明俳句会 令和8年全国大会実行委員会



令和八年水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼題 「春光」 春の色、春望、春景色

「堇」 すみれ、花堇、堇摘む、一夜草（スミレは不可）

「中」 詠込み（春の季語で詠む）
※右の傍題以外は不可とします。

句数 通じて二句（一組）

- ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
- ・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円

締切 四月十五日（発行所必着）

※投句用紙（三月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

なお、令和八年水明全国大会は六月二十八日(日)です。

春の吟行会のご案内

- [日 時] 令和8年3月29日(日)10時00分 受付
【雨天決行】 12時30分 投句締切
- [会 場] 熊谷市男女共同参画推進センター[ハートピア]
360-0037 熊谷市筑波3丁目 202 ティアラ 21 (4階)
- [投 句] 2句(瞩目吟)
- [参加費] 1,000円
- [申 込] 3月18日(水曜)までに参加費と申込書を添えて発行
所総務部宛お申し込み下さい。

※ 熊谷の桜堤の桜並木がとても見事です。

日時をご確認の上奮ってご参加下さい。

※ 昼食・飲み物の用意はありません。各自でご持参下さい。

事業部

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
- [作 品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手
を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
- [送付先] 網野月を

電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

風 声

○現代俳句一月号「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

それぞれに意味ある事よ雪女郎

梅澤輝翠

うす味に大根を煮て齡かな

永野史代

村ひとつ眠るダム湖や冬木の芽

檜鼻ことは

風を呼ぶ胡桃細工のイヤリング

越田栄子

○くぢら（中尾公彦主宰）一月号「受贈俳誌美術館」欄

独り酌む粹酒「加賀鳶」こつごもり

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）一月号「受贈誌拝見」欄

秋淋し腹話術師の独り言

鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）十月号「受贈誌紙お礼」欄

独り酌む粹酒「加賀鳶」こつごもり

鬼之介

今さらの男系男子いぼむしり

境 延昭

地球めらめら新涼とは名ばかり

青木鶴城

○雪嶺（石本雪鬼主宰）春・夏号「受贈誌」欄

提督の肖像厳と夏館

鬼之介

年頃となりて身につく藍浴衣

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）一・二月号「他誌拝見」欄

その奥にかな女居さうな秋簾

鬼之介

○菜の花（平賀節代主宰）一月号「諸家近詠」欄

祝宴の椅子の軋みや秋の声

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）七八号「受贈俳誌より」欄

秋淋し腹話術師の独り言

鬼之介

○翫（山本一步主宰）一月号「受贈誌の一句」欄

厨の隅に魔除けのごとき唐辛子

石川理恵

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和八年一月三十一日現在 —

山戸美子	3	口	羽島秀子	5	口
清水桂子	5	口	横山君夫	10	口
野口和子	3	口	— 合計 —	26	口 —

水明通信

さいたま市 香田裕誌

私は昨年米寿を迎えた。老人性症候が顕在化し、かつ認知機能が衰えつつある。日常の病院通いを熟し多種多量の薬を飲むが、左様に多くの患いを抱え家に籠るより積極的に杖を頼りに外出している。毎月泊り掛けの独り旅もしている。旅の道中での出合を楽しみ、地酒と郷土料理の晩酌は至福の一時である。旅は列車とバスとタクシーを組み合せるので費用が高むが楽しみには変えられない。旅では予想外の出来事に遭遇するが切り抜け旅を続けた経験も多くある。

後記

三月号をお届けすることが出来ました。多くの皆様からのお力添えとご声援、誠に有難うございます。

今年の冬は、豪雪と渇水のニュースが大きく取り上げられておりました。テレビでみる豪雪の模様を報道する映像は、関東に住み暮らす筆者には想像もつかないほどのものです。三月を迎えて、少しでも早く春になってくれることを願います。そして被害のないことを祈ります。

三月というと十五年前の東日本大震災を思い出します。ほとんどの方がその時刻、何処にいて何をしていたのか、その際の体感を明瞭に記憶しているようです。筆者は新宿におりました。十名ほどで句会の最中でした。屋外に避難し

て、其処での光景は新宿西口の高層ビルが竹のように撓って揺れている姿でした。十名はJRが動くのを待ちましたが、結局不通のままで、それからは避難所を探しました。都庁も高島屋デパートもいつぱいとの情報で、新宿文化センターまで避難して、一夜を明かしました。ペットボトルの水と乾パンを支給され、毛布を二枚貸してくれましたが、余震の続く中、なかなか眠れなかったことを覚えています。

閑話休題。

編集部スタッフの異動をお知らせ申し上げます。前田夏野さんは、一月号、二月号の発行にお力添えいただきましたが、退任されました。本号からは新たに丸山マズミさんに参画していただくことになりました。今後の水明誌のために、豊富な経験と知見を伝授していただくと思います。(月を)

今月のはてな？

鳥兎匆匆(うとそうそう)

海桐(とべら)

目交(まなかい)

歎(そばだ)てて

身酒(みざけ)

枳(ます)

木履(ぼくり・ぼつくり)

將軍(はたまた)

只管(ひたすら)

頁 6 9 17 18 26 33 55

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願います。)

水明

令和八年三月号

通巻一一四六号

令和八年三月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央美版

令和8年「春の吟行会」

参加申込書（申込締切3月18日(水曜日)）

春の吟行会 3月29日(日)	会費 ¥1,000	出席します
----------------	-----------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費 1,000 円を添えて申し込みます。

2026年 月 日

住所 〒			
氏名		電話	— —

申込書送付先

〒330-0064

さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

[緊急連絡先]

電話番号	— —
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届けください。

緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

季音抄

山本鬼之介

たうたうと坂東太郎冬麗
南岳の初咆哮や御降り来
聖堂の静寂冬の夜の祈り
薪を割る音の重たき雪催
飴色の若き日の櫛小春かな
瑞鳥の現るるころほひ初山河
薄ら日を富士と分け合ふ枯野かな
歛てて梟を聴く峡の宿
珠ほどき白鳥となる夜明けかな
家格ゆかしき母の嫁荷の春着かな
天よりの白き恋文淑氣満つ
梵鐘や去年と今年の橋渡し
志士たちの馳せし道なり藪柑子
冬の朝息の合うたる杜氏唄
結初の銀杏返しよ浅草寺
幻の利休枯野に手招きす
松過ぎの風も素通り寺の町
逆上り出来さうな君冬日和

山中みどり
網野月を
石井喜恵
井上燈女
石山かつ子
大橋廸代
曲淵徹雄
原田秀子
大場順子
正木萬蝶
梅澤佐江
青木鶴城
横山君夫
池田珪子
染谷風子
鈴木玲子
渋谷さいち
石田慶子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

袖子風呂の一個のゆずが近寄らず
 奥座敷小春明かりに木木の影
 根深剝くツイッギーの脚懐かしや
 まづ頬に冬日差したる六地藏
 針と糸心愉しき小春かな
 馬籠宿足を滑らす時雨坂
 霜の声聴きつつ愛づる銘酒かな
 小春日や古墳の堀は萌黄色
 山城の銃眼抜くる神渡し
 出雲発寝台特急極月へ
 潔く布団抜け出す主婦の朝
 古地図手に街道ひとり神の留守
 ニニ・ロツソ響く路地裏寒昂
 山茶花や誰にも言へぬことひとつ
 年の瀬や髪形粋な担当医
 枯野宿竈火照らす顔の黙
 木枯の吹き残したる月白し
 棟上げの祝詞高らか小春空

飯田忠男
 綿引まりこ
 反町 修
 石関六弦
 霜多光代
 寺町知子
 倉田星歩
 秋谷風舎
 皆川更穂
 森下山菜
 本橋稀香
 田中弘子
 元田亮一
 前田夏野
 丸屋詠子
 小林京子
 菅原真理
 岡田宣子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和八年三月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第三号)

定価 一〇〇〇円